

沖永良部島方言語彙のアクセント資料 (4)

上野善道
(東京大学)

Examples of Vocabulary of the Okinoerabu Island Dialect of Japanese with Particular Reference to Prosodemes: Part 4

UWANO, Zendo
The University of Tokyo

Wordlists of the Okinoerabu Island dialect of Japanese are given with the accentual information. In part 4, words beginning with the *ha*-column of the Japanese syllabary are dealt with.

Keywords: Keywords: accent, dialectal vocabulary, Okinoerabu Island dialect, Japanese

キーワード : キーワード : アクセント, 方言語彙, 沖永良部島方言

はじめに*

これまでの一連の発表,

拙稿 (2005) 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料 (1)」『琉球の方言』29: 1-40

拙稿 (2005) 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料 (2)」『アジア・アフリカ文法研究』33: 155-204

拙稿 (2006) 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料 (3)」『琉球の方言』30: 1-49

に引き続き, 今回は「その (4)」として八行を取り上げる。

内容は, 琉球方言の一つ, 鹿児島県沖永良部島和泊町の和泊 (わどまり) 方言を対象とした

甲 東哲 (きのえ とうてつ) 編 『島のことば 沖永良部島』, 三笠出版, 1987

に基づきながら, 和泊町皆川 (みながわ, [Nja]:[gu]) 方言の話者である

皆村 英治 (みなむら えいじ)・昭 (あき) 御夫妻

に, 一つ一つ使用の有無と, 使う場合はその音形を聞いたものである。主話者としてお願いしたのは昭氏で, 英治氏は常に側に付き添ってその補佐をして下さった。

* 長時間に渡ってご協力を賜った皆村英治・昭御夫妻に心から御礼申し上げます。甲氏の御本を下された, 奥様の澄枝氏にも感謝申し上げます。本稿は, 科学研究費基盤研究 (B) 「琉球諸方言要地アクセントの緊急調査研究」(課題番号 18320064) の成果の一部である。入力に際しては東京大学大学院の R A 孫在賢さんの, そして本誌投稿規定に合わせた整形は同じく T A 姜英淑さんの助力をそれぞれ得た。

この調査の目的についてはその(1)に書いた。本土方言に片寄った既存のアクセント調査語彙の枠を離れ、琉球方言に属する沖永良部島方言について、長い語形をも含む日常語のアクセントをたくさん集め、それに基づいてアクセント体系を構築することにある。そのための一つの手段として、地元の方言集を活用しようというものである。

提示形式に変更はないが、下記にそれを掲げる。原則として、特殊記号を使わずにキーボードだけから入力できるようにしたものである。

- | | | | |
|-------------------------|---|------------------|-------------------|
| [| - ピッチの上昇 |] | - ピッチの下降 |
| % | - ピッチの中程度の上昇 | = | - 付属語がそのまま高く付く |
| - | - アクセント単位の切れ目 | | |
| ' | - 声門閉鎖音 | I, E | - i, e の中舌母音 |
| P, T, C, K, M, (音節頭の) N | - 無気喉頭緊張化音の | p, t, c, k, m, n | |
| N (音節末) | - はねる音(ン) | F | - フ, ファなどの子音(ファイ) |
| cj | - チ, チャなどの子音 | sj | - シ, シャなどの子音 |
| cu | - ツ | zj | - ジ, ジャなどの子音 |
| . | - 半長 | 。 | - 無声化 |
| () | - 任意 | | |
| (:) | - 単独形では母音が長い ^が 、助詞付き形では短くなる印。 | | |
| [ka]mi[:] | - 単独形は [ka]mi[:], 助詞付き形は [ka]mi[nu (nu は主格助詞) | | |
| (OK) | - 見出しのカタカナと異なる ^が 、これで間違いない意 | | |
| × | - 使わない | <o> | - 昔の人が使った古形 |
| <m> | - 稀 | <?> | - 迷い、はっきりした答え得られず |
| o (本文中) | - この意味・用法があることを確認済み | | |
| 【】 | - 原文にはなく、上野が付け足した注記 | | |

元の方言集にある記号は、手を加えることなく、そのまま用いてある。問題になりそうなものだけ、原文のまま抜き出す。

- | | | | |
|-----|--------------------------------------|---|-----------------|
| { } | - 「方言の直訳」 | ・ | - 「複数の言い方がある場合」 |
| / | - 「かなが続いた場合、読みやすくするため、単語や分節の切れ目に入れた」 | | |
| | 【むしろ形態素境界】 | | |

八

ba[:] パー 嫌だという意味の返事。

[ba]ba[:], [baba]ku[su] パパー・ババクス パーの意を強めた語。

ba[:]ga: (OK) バンガー 考えるまでもなく嫌だの意を表わす返事。

[Pa:, Pa[ra] パー・パラ 皆無。「金がみんなパラなった」 [Pa:][na]ta[N].

[ha:]kicjame ハーキチャメ 驚嘆の意を表わす感動詞。

ハージ 度毎に。「夜のハージ」 [jiru]nuha:[zji (夜毎に)

[ha:]se, [hai]da ハーセ・ハイダ 疲れたときに発する感動詞。

× ハイ 呼びかけのことば。「ハイ、太郎、そこで何してるか」【むしろ, ['o]i】

[ha]i ハイ 牛馬に対する合図で「気を付けよ」。重荷を負って坂を下るときなどに発する。

【むしろ, 歩けの意】

× ハイ 夜光貝。

× バイセン 明治の頃まで鹿児島と奄美の島々の間を通っていた帆船。普通、旧十月に入港し翌年三月に出港した。これをアラウリ(新下り)という。それに対して三月に行き五月に来、さらに上って七月に来るのをニドフジ(二度漕ぎ)と称した。多くは和泊港を利用し、その波が荒いときは裏港の伊延港を利用した。食糧・日用品等を積んで入港すると港は賑わい、×ヒナトズリ・×シドゥズリと呼ばれる遊女の姿も見られた。出港の際の主な荷は砂糖であるが、その他牛骨等も買入れた。老人の記憶にある船名には順幸丸・若石丸等がある。バイセンは商売船を略したものと思われる。なお、沖縄からは×マーラン船と称される帆船が昭和十年頃まで来た。薪や藍玉・泡盛・材木等を持って来て、子牛を積んで行った。

ha[ka= ハカ 墓地は内陸部を除く大部分が海岸の砂地帯にある。一家もしくは一門毎に数坪の面積をもち、周囲は方形に石垣で囲み、南側に入口を設けるのが普通である。墓石は南向きで一列に並べる。石垣の囲いの中は座敷と同じ感覚でとらえ、履物は入口で脱ぎ、礼拝も正座してする。島で最大の和泊町兼久原の墓地にさえ、明治以前の墓石は数える程しかないので、島における墓の歴史はまだ新しいと言える。×墓を指さすと指が腐れる。もし指さしたら「海の大魚食ってハンマ」と唱えて、その指を口にくわえなければならない。墓にニジ花 ni[zjibana (とげのある植物【バラのこと】)を供えるものではない。墓地に自生するてんにんぎくを家に持ち帰ると母の乳房に腫物ができる。

ha[kasabure ハカサブレ 墓さらえ。墓の清掃。盆の十三日、正月前等には必ずこれをなす。

ha[kanu][sjo:]ga[cji ハカヌ/ショーガチ 墓の正月。一月十六日で、この日は自分の家の墓はもちろん、親戚の墓にもお参りする。死者があつてから初めてこの日を迎える家では、ターニム/ムチ [ta:]nimumu[cji (田芋餅)その他菓子・酒肴等を墓前に供え、夜まで詰めていて故人をしのぶ。また、この日は海や山へ行くものではないとされる。

[ha]ka[me ハカメ 墓参。定期的には一日と十五日にする。死者のあつた家では初七日までは朝夕する。

[haga]sju[N] ハガシュン 剥ぐ。○潮気 [sju:] をゆすぎ去る。○角力や喧嘩で取っ組み合っているのを引き離す。

[haga]ni[:] ハガニ 鏡。ha[gani= 鶏のとさか。【両者はアクセントが異なる】

ha[gama ハガマ 羽釜。つばの付いた飯炊き用の釜。

[haga]ju[N] ハガユン 引っぱる。

[haga]isacju[N] ハガイサチュン 引き裂く。

- [ka]ki[·(OK) ハキ 「間に合う」の「間」にあたる語。
 [ka]ki[-]'o:]ra[N (OK) ハキ/オーラン 【時間が】間にあわない。
 ha[gi], ha[ga] ハギ・ハガ 陰。影。容姿。風彩。
 [hagi]kumi`uni[sju ハギクミ/ウニシュ 影踏みごっこ。
 [hagi]sjiga[ta ハギ/シガタ 容姿。
 [ha]gi[sja ハギ/シャ 〔陰下〕ものかげ。
 ha[gi]-%sukurijuN (OK) ハギ/スクリユン 容姿がおとろえる。【su[kuri]juN は(寝たきりなどで)衰える意。】
 ha[gi]namuN ハギ/ナムン ざっとした奴。人を罵っていう語。【姿の醜い奴。捨てぜりふ】
 [hagi]nja:[sja]N ハギ/ニャーシャン 容姿・風彩がみにくい。
 ha[gi]-%[su]cjuN (OK) ハギ/ヒチュン 〔影をひく〕精力の衰え果てた容姿になる。○死相が表われる。
 ha[gi]-%[jabu]rijuN ハギ/ヤブリユン 〔影破れる〕容姿がうらぶれる。
 × ハキシジ 重要な物をしまうための箱。(古)「かけずり」(硯箱の一種で下部に物を入れる引出しがある)。
 [hagi]juN ハギユン 禿げる。剥げる。
 ba[kijuN バキユン 化ける。ランプの火の燃えぐあいが変になる。
 ha[gu]=, ha[gumicja ハグ・ハグミチャ 粒子の細かい土の一種。
 ha[kui ハクイ 囲い。屋敷の周辺の樹木。主としてがじゅまるやふくぎ等。【土堀も】
 [ba]ku[jo バクヨ ばくろう【牛馬の】。
 [ba]ku[jo]-%sjuN バクヨ/シュン 〔ばくろうする〕物々交換する。
 [baku]rasjuN バクラシュン 仕損じる。しそこなう。
 [haku]rijuN ハクリユン 隠れる。
 × ハクリジョ かくれんぼう。「もういいかい」にあたる言葉はなく、「もういいよ」にあたる合図としては×「チュイ」と言う。
 [haku]rimo:[ri ハクリモーリ 逃げ隠れ。
 [ha]go[sa]N ハゴサン 憎い。強意ではユン/ハゴサン [juN]hago[sa]N・ユンチラゴーサン [juN]cjirago:[sa]N。
 [hago]micjuN ハゴミチュン 憎む。
 [ha]sa[(:) ハサ 傘。笠。普通両方とも「かぶる」という言い方をする。
 ha[za- ハザ 匂い。
 ha[za]-%sjuN ハザ/シュン 匂いがする。匂う。
 ha[za]-%ha[mjuN ハザ/ハミン 匂いをかく。
 ha[sazjuN ハサジュン ○(植物の葉などを)もぎ取る。○(茎などを)細かく分ける。
 × ハザニ 〔風根〕台風の前兆として現われる月や太陽にかかる雲の傘。
 × ハサピユン 重ねる。
 [hasa]mizaka[na ハサミ/ザカナ 正月・歳の祝等の際の祝儀用の着。昆布・するめ・豚肉等を小さく切ったのをを用いる【添える】。
 ha[sji] ハシ 頭上運搬をするとき、物の下、頭の上に載せるもの。藁を径一五センチ程度のドーナツ形に巻いて作る。桶座。
 ha[sji] ハシ 箒。かつては×ハシガラという灌木の枝で作った。
 [ha]sji[(:)[ハシ 生糸の束。×生糸を巻く道具。織物の経糸。(古)「かせ」(つむいだ糸をかけて巻く工字形の木具。またそれに巻いた紡糸)。
 [ha]sji[(:)[ハシ 味噌や醤油・焼酎の原料。
 ha[sji] ハシ 戸板。
 × ハジ 口笛。夜、口笛を吹くと妖怪が寄って来るといふ。また、ハジを吹くとハジ(風)が吹き出すといふ。したがって、舟で口笛を吹くことは忌まれる。ユイユタ(初七日の魂寄

せ)にはユタが口笛を吹いて霊を呼び寄せた。逆にハレグチ(生霊を追い払う呪術)の際もハジ(風)で吹き飛ばすという意味で口笛を吹いた。

ha[zji· ハジ 風。

× ハジ/シャ 風下。

ha[zjину'icji_sji]raN ハジヌ/イチ/シラン [風が息しない]無風状態になる。

× ハジヌ/クウ (植)[風の子]つきいげ。

ha[zjину_[saga]ju]N ハジヌ/サガユン [風が下がる]風が北から東になる。

ha[zjину_tu]rijuN ハジヌ/トゥリユン 風が静まる。

ha[zjiFucji ハジフチ [風吹き]台風。毎年、夏から。秋にかけて襲い、家屋・作物等に大きな被害をもたらす。しかし、台風に伴う降雨が恵みの雨である場合も多い。特に八月中旬は砂糖きびの夏植えの時期であるが日照りが続くのが常であるため、台風のもたらす雨に期待する。台風一過後は家屋の修理、蒔の植え付け、燃料用の松落葉集め等で多忙となる。台風が特に強い年の前兆。蜂の巣の位置が低い。例えば草の葉や蒔づる等に巣を作る。クカル(りゅうきゅうあかしょうびん)が山の深くに巣を作る。みかん等果物の実りが多い。松かさが多く付く。雨が少く日照りが続く。前年の大みそかに風が強かった。旧正月の四、五日までに風の強い年は五月に、十日まで風の強い年は九、十月に台風がある。はいきびの葉に節が一つあれば一回、二つあれば二回の台風が吹く。

<o>ha[zjiFucjida:muru, -ta:muru ハジフチ/ダームヌ [台風焚き物]台風の後には山に松の落葉・枯枝等が落ちている。このハジフチダームヌを集めるため婦人や子供で山が賑わう。

× ハジフチヌ/ナーチャウ, チュイグウヌ/ヒニイジャシ (諺)[台風の翌日は一人っ子の船を出せ]台風一過,海がおだやかになるから。

ha[zjimurusji ハジ/ムルシ 塵旋風【突風】。

<m>[hazji]mo:]ja ハジ/モーヤ 風車。【むしろ ha[zjimurusji]

- × ハジ 昇天しえず地上をさまよっている亡霊。明治の頃までは、家畜が食欲をなくしたときなどユタにうらなわせると「これはハジになっているものがよりついているからだ」と称してハジ除けの祈祷をすることがあった。その際デーク(だんちく)を末の方から一メートル程切り取って、それで家畜を叩き、塩をまいて清めをした。また、和泊海岸のクビキリマタ(昔罪人を処刑した所)はよくハジのあたる所だということで、子供を連れていくことを避けた。明治の末頃、産後十日前後の某女が道を歩いていたら、気持ち悪い風に吹かれて身の毛のよだつ思いがしたが、家に帰ってから発熱して間もなく亡くなった。当時の人々はこれをハジイチョタン(ハジに行きあたって)と称した。

ha[zji] ハジ 意地。我意。

ha[zjiFai, ha[zjiFaja ハジ/フワイ・ハジ/フワヤ 意地っぱり【な人】。

ha[zji] ハジ 足。

× ハジ/オーシ 二人向かいあって座り、立てた片足をからめあって、相手の足を倒した方を勝ちとする遊び。

[hazji]to:]ri ハジ/トーリ [足倒れ]足の不自由な人。

<m>ha[zji]nu_['uN]ki[wa_ku[cjину_['uN]cju]N ハジヌ/ウンキワ,クチヌ/ウンチュン (諺)[足が動けば、口が動く]運動すれば腹が減るの意【むしろ,食べ物口に入る意ではないかと。だまっちは何にも得られない。】

[hazji]ne:]gu ハジ/ネーグ ちんば。(古)「あしなへぐ」。

ha[zji_[]ne:]zju]N ハジ/ネージュン ちんばをひく。

ha[zji_[]hji]ju]N ハジ/ヒユン 足をける。つまずく。

× ハジ/ヤミワ/ヤシティ, ティー/ヤミワ/コイユン (諺)足病みはやせ,手病みは肥える。足病みは運動不足のためやせ,手病みは仕事せずぶらぶらしているので肥える。

<o>ha[zji] ハジ 蚕を飼うための平かご。

[haʃji]kaju[N ハシカユン 便秘する。

ha[zjigi ハジギ (植) おおはまぼう。防風林となる。葉【の裏】は蚕のまゆの口出しに使う。【撫でると、くっついてくる】

× ハジギヌ/ミー 「ハジギヌミーヌ、ウニトゥラガ……」(ハジ木のしげみの、鬼たちが……)と唱えながら、屋敷林の木の上を枝から枝へと渡ってする鬼ごっこ。

[haʃji]giju[N ハシギユン ○背負う。○かつく。○おんぶする。○借金を踏み倒す。

[haʃji]gito:gu[ra ハシギ/トーグラ 母屋から屋根をはみ出させて作った台所。材木の節約と防火のため土壁にすることが多かった。

× ハシギ/ドーマイ [かつぎ手毬] 大型の手毬。

[ha]zji[:-[Kiri]ju[N ハジ/キリユン [恥切れる] 恥かしいのをこらえ、恥かしいままで押し通す。

ha[sjigui ハシグイ 痰。

[hasji]cji(:) ハシチ 赤飯。すなわち糯米に小豆を混ぜて蒸したもの。糯米や麦を蒸したものの。(古)「かしぎ」(飯を炊くこと。炊事をする事)。

<m>[hasji]cju[N ハシチュン 粳種を水に漬けておいてから、一昼夜してかますに入れ、かまどや堆肥等の傍に置いて発芽をうながす。

× ハシチュン 不意の来客等のため、少量の必要分だけ粳を搗いて米にする。

[hazji]cju[N ハジチュン ○水にもぐる。○水中に落ちる。(古)「かつく」(水中にもぐる)。

ha[zjitui ハジトウイ ○梶取り。○競走の最後尾。

[hazji]miju[N ハジミユン ○しまう。○始末する。【cf. ha[zjimijuN (始める)】

× ハジメヌ/ハラサドゥ、アトゥヌ/アマサ (諺)[初めの辛さが、後の甘さ] ものごとは初めを厳しくすることで、後を寛大にすることができる。

× ハシャ 髪敬語。「かしら」の転か。

ba[sja] バシャ 芭蕉。長い間最も貴重な繊維の原料であった。表皮に近いところの皮をウワーホ <o>[ˈwa:ho(:) その下をナー/ナーグ [na:]gu(:) という。その下の芯の近くを × チー/ナーグといい、ここから採れる繊維がいちばん上質である。チー/ナーグとナー/ナーグからの繊維は上質の芭蕉布を、ウワーホは作業着を作るのに使う。搭ぎ取った皮は藁灰で煮て粕を去って繊維を一本一本取り出す。この一連の作業を × バシャシーという。一反分を織るのに芭蕉四〇本を要したという。なお、芯は食用にもなった。

[basja]’u[mu, [basja]nu[mi バシャ/ウム・バシャヌ/ミ 芭蕉の実。【バナナのこと。繊維を取るのとは種類が異なる。】

[basja]go[ta バシャ/ゴータ 芭蕉の皮を幅数センチ程度に細長く裂いて乾かしたもの。【草履の鼻緒に巻くと足が痛くない。】

[basja]gotasa[ba バシャ/ゴータ/サバ 藁草履の鼻緒をバシャゴータで巻いたもの。足指へのあたりが柔らかく豆がでにくい。女の子はさらにこの上を赤い布で巻いたりする。

[basja]cjiba[ra バシャ/チバラ 芭蕉の繊維で織った着物。さらっとして涼しく夏向きである。

[basja]ja[ma バシャ/ヤマ 芭蕉山。山というけれども必ずしも高い必要はない。芭蕉の群生地。貴重なバシャヤマを添えてでないといと貰い手がないという意味で不美人のこと。

[hasja]ga[Fa ハシャガフワ [柏葉] 食物を包んだりすることができる広い葉。芭蕉や × げつとう、× くわぜいもの葉など。【炙ってからおにぎりなどを包む。食べ物を食べた後は、葉は捨てる。また、祝儀の苞としても用いた。】

[hasja]gaFamu[cji ハシャガフワ/ムチ [柏葉餅] 小麦粉と黒糖と蕎麦を練り合わせてげつとうの葉に包んで蒸した菓子。げつとうの葉の香気が菓子にも移る。分けるときは葉に包んだまま切る。

ha[zjagajuN ハジャガユン 【いい気になって】つけあがる。

× ハジャティ 台所の出入口。

[hazji]ju[N] ハジユン ○着物等を脱ぐ。○かぶっているふとんをはがす。○屋根を取りはずす。

ha[zju]N ハジユン 配る。分配する。

[hazji]Fa[i] ハジフワイ 配分。【動詞・名詞両形のアクセント、これでOK】

[ha]zju[N] ハジユン 搭ぐ。×舟を造る。

ha[zji]ra ハジラ かずら。諸のつる。

[hazji]ra'i[sji] ハジラ/イシ 家の回りに並べて植える長方形で長さ二〇センチ程度の石。?庭水が床下に浸入するのを防ぐ。【むしろ、踏み台代わり】

ha[zumi]N ハズミン はずむ。気前よく金品を出す。

ha[zjiju]N (OK) ハズユン 削り取る。○砂糖きびから、はかまを取り去る。

ha[zosa]N ハゾサン 風が強い。国頭字では転じて×気が荒いという意味にも使われる。

ha[ta= ハタ (一)○陰。「風のハタになっている。」(二)○味方。「弱い者のハタをする。」(三)○ほとり。「川のハタに ha[tani] 生えている木。」

ha[ta= ハタ 織機。糸車。

ha[ta= ハタ 片。

[hata]gu(・) ハタグ [片伍] 対のもの片一方。【下駄などの】

[hata]kuna[sa]N (OK) ハタグ/ナサン [片伍なし] 寂しい。○せっかく遠方からの来客があったのに、もてなしの準備がなく、客も多忙でゆっくりすることができない等で厚意を尽くすことのできない寂しさ。○家族の一人が旅立った後、残った者の寂しさ、一人暮らしの寂しさ等をいう。

[hata]gumazji[ri] ハタグ/マジリ [片伍混じり] 箸や履物など対であるべきものの一方が、他のものになっていること。例えば長いのと短いのが一組になっている箸。

[hata]sjibakuN[cja] ハタシバ/クンチャ・ハタスバナガ 着物を着て裾の長さがそろわないこと。

× ハタスディ/ヌジ 片袖脱ぎ。

[hata]cjcju[N] ハタチチュン 片づく。はかどる。

[ha]ta[do] ハタド 分配の不公平。一方には多く、一方には少く与えること。

[hata]hja[:] ハタヒヤ 片身。魚を三枚におろした際の片方の肉。

[hata]hja'ju[:] ハタヒヤ/イユー (魚) かわいい・ひらめ。

[hata]bu[i] ハタ/ブイ 片降り。夕立ち。

ha[ta'usji] ハタ/ウシ 着物の肩当て。

[bata]guriju[N] バタグリユン あわてる。じたばたする。

ha[tagwa:sji, [junu]kugwa:sji] ハタ/グワーシ・ユヌク/グワーシ 米の煎り粉に砂糖を混ぜて湯で練り、菓子型にはめてから打ち出したもの。お盆のお供え物の一つ。【同じ物。アクセントはこれでOK。】

ha[tasa]N ハタサン × 固い【御飯や餅は [Fa]:[sa]N】。○苗の植え方が密である【苗に限らず、密植】。

ha[tabire] ハタビレ × 飯や○粥の固いこと【おじやの水分が少なくなった状態】。

× ハタマ 珊瑚礁内にあって底が深海に続いている穴。

[hata]mi:cji ハタミーチ 数えの三歳。満一歳をユヌヤ [ju]nu[ja], その後正月を迎えるとハタミーチになる。二歳とは普通言わずユヌヤを過ぎたという。

[bata]mikasju[N] バタミカシュン なぐる。

[hata]miju[N] ハタミユン 肩にかつぐ【一人でも二人でも言う】。二人でかつぐときは sa[sji] サシ(竹の棒)を用いた。西原字での古老の話によると、明治の頃は一六〇斤の砂糖樽を港のある和泊に運ぶのに二人でサシでかついで掛け声をかけながら行った。普通日に三回、すなわち三丁運んだ。この人夫になって稼いだ人は今でも肩がこぶ状になっているという。

[hada]mu[cji] ハダムチ [肌持ち] 気候の感触。「秋が来てハダムチがよくなった。」

[həta]mu[nu] ハタムヌ 織機。

ha[tajuN] ハタユン 〔語る〕教える。× 告げ口する。ナロシュン [naro]sju[N] (教える) は上下関係だがハタユンは必ずしもそうではない。

[hata]Ncju[N] ハタンチュン 傾く。

ha[cji=] ハチ 毎朝先祖棚に供えるお茶や水。○よそから何か食物をいただいたときは、まずその一部をハチとして先祖棚に供える。「初」の転。

ha[cjika`uimi] ハチカ/ウイミ (諺) 二十日初目。赤子は二十日すると視力がつく。

ha[cjigi] ハチギ (植) はぜの木。

ha[cjigime] ハチギメ はぜ負け。はぜによるかぶれ。【下を歩くだけでもかぶれる。】

[hacji]kirimu[N] ハチキリ/ムン でしゃばり者。?男性に対してはあまり言わない。

[hacji]gurasju[N] ハチグラシュン 動詞につけてそのことに失敗する意を表わす。「言いハチグラシュン [i:hacjigurasjuN] (言いまちがえる)【cf.[hacji]macji[ge] 書き間違い】。

ハチグウチヌ, [mudu]iti[da] ムドゥイ/ティダ (諺) 八月の戻り太陽。旧八月の残暑をいう。

[hacji]ko[sa]N (OK) ハチコーシャン ものの屑などが皮膚についてむずがゆい。

ha[cjizju:go] ハチジュウゴ 八十五。この歳の祝は本土に出ている子や孫も帰省して祝う。祝いは七十三歳と同じ。

ha[cjizju:has]sai ハチジュウハッサイ 八十八歳。米寿。歳の祝ではないがガンヌエー [gaN]nuje[: (賀の祝) と称して盛大に行う。正名字ではトーカチとも。

[hacji]cji[:] ハチチ しらひげうに。卵巣を生で食べる。天ぷら、雑炊のだし、酒の肴、卵とじ、しおから等にする。

[hacji]cju[N] ハチチュン はじく。

× ハチチ/グワーシ 〔はじき釣り〕碇形の釣針で餌(青のりやたこ墨)に寄ってくる魚を引っかける釣り。対象はモーハニ(あいご)やフスク(にざだい)

[hacji]cjimudu[sji] ハチチ/ムドゥシ 〔はじき戻し〕三味線の弦をはじき鳴らして、その指を手前に返すときにも軽く弦に当てることによって同じ音を二度連続して出す手法。

× ハチチャ 〔はじくもの〕しゃこ。

ha[cjibaru] ハチ/バル 〔初畑〕正月二日に畑に出て短時間軽い仕事をする。なお、×この日は比較的遠方の親戚知人への回礼をする。

× ハチブル 飯面。

× ハチャグミ 煎り米。お茶の代用にする。

[hacja]buju[N] ハチャブユン 吐き散らす。

[ha]cju[N] ハチュン 縄と縄をより合わせて大綱をつくる。(古)「かく」(編みなす)

[hacji]rijju[N] ハチリユン 飢える。(古)「かつゑる」。

[hacji]riga[mi] ハチリ/ガミ 飢えたようながつがつした食べ方。

[hacji]rimu[N] ハチリ/ムン 飢えている者。

has[sa], ga[sa](後者が普) ハッサ これだけ(の量)。

[gasa]dona[: ハッサドナー こんなに多く。

[gasa]na[: ハッサ/ナー これだけずつ。

[ga]sa[be] ハッサ/ベ このくらい。

[gasa]bena[: ハッサベ/ナー このくらいずつ。

[gasa]N[cja] ハッサンチャ これっぽち。

× バツタイ どうにも。「借金がかさんでバツタイならん」。

[bat]ta[i], [bak]ku[i] バツタイ びっしょり。ずぶ濡れのさま。

× ハツテ 強壯。「ハツテナ青年達」。

hatto, gatto(後者が普) ハット これだけ(の長さ), ハットドナー [hatto]dona[: ハットナー [hatto]na[: × ハットベ × ハットベナー ・ハットンチャ ?[hatto]N[cja] 等, ハッサと同じ用法がある。

- ha[tejuN ハテユン (両足・着物の前などを【無意識に】) 広げる。強意はヤンパテユン [jaNbatajuN, [jaNbatejuN 【下品とされる振る舞い】。
- [hati]ju[N ハティユン 副食物として食べる。御飯の不足を補うため蕎麦を食べる場合も、蕎麦をハティユンという言い方をする。
- [hati]mu[N ハティ/ムン 副食物。
- ハティユン ~果てる。~尽くす。「仕事をしハティユン [sji:]hatiju[N 【=最後までやる】】。
- 【[hacji]hatiju[N 書きはてる =最後まで書き通す】
- × ハナ 匏。(古)「かな」。
- × ハナカンギ (植)〔鼻かみ木?〕ながばのあこう。生長が早いので屋敷林に利用される。葉は牛馬の飼料となる。
- ha[na-][kuzji]riju[N ハナクジリユン 鼻がつまる。
- [hana]gu[mi ハナグミ 〔花米〕ユタが神に供し、占いに使う米。
- [hana]gu[ri ハナグリ じゃれあい【人の】。
- × ハナジー 明治の頃まであった風習。正月近くになるとメーラビ(乙女)達は、一人の家に集ってミーヌチンチ(木綿紡ぎ)をした。そこへ青年達に来て「ハナジーをしよう」ともちかける。ハナジーには男は鶏、女は味噌・米等を持ってきて食べながら、三味線をひいたり歌ったりして楽しむ。ハナジー用の鶏は手頃な家から盗む場合もあったが、これは黙認されていた。家が新築された場合も、そこで一度はハナジーをするのが例であった。さらに新築後最初に迎える正月十六日にはハナジー直しと称して、再び材料を持ち寄って御馳走をして食べ、かつ遊んだ。
- ×(言えば ha[nasjicji) ハナシチ 風邪。
- ha[nasja]N ハナシャン 愛しい。(古)「かなし」。
- [hana]gana:[tu ハナガナートウ 愛しげなさま。
- ha[nasji]agu ハナシ/アグ 愛し友。仲良し。
- ha[nasjigwa: ハナシ/グワー 愛し子。いい子。おとなから子供へ呼びかける言葉。
- ハナセー ha[nase]: (OK) とも。
- ha[nasja]: ハナシャー 愛しや。おとなが幼児を抱きしめながら言う言葉。
- × ハナシャドウ, ウマサ (諺)〔愛しさが, うまさ〕仲良し同士で食えば何でもおいしい。
- × ハナシャヌ/クワウ, ウニニ/ムマシ (諺)かわいい子は鬼にもませ。
- ha[nasjiru ハナシル 〔鼻汁〕鼻水。
- [hana]zu[mi-][ti]sa[zji ハナズミ/ティサジ 花染手拭。紅花で模様を染めた手拭。昔はこれを愛人への贈物にしたという。【唄の中で。沖縄のもの】
- × ハナヌ/フラキワ, マイム/フラチュン (諺)〔鼻が開けば尻も開く〕鼻をうごめかして自慢していると、しまりがなくなり収支つぐなわなくなる。
- ha[na-][hacji]cju[N ハナ/ハチチュン 〔鼻はじく〕鼻につんとくる。大根おろし等の刺激が強いことをいう。【わさびなどにも】
- × ハナバン 〔金盤〕一升ます。チョーバン(京盤)とも。
- ha[na-][hju]N ハナ/ヒユン くしゃみをする。くしゃみをしたら傍の人が「クスクレ, シバイクレ」 ku[su].kure, sji[bai].kure (糞食らえ, 尿食らえ)と唱えてやらなければならない。
- × ハナヤマ/グチ 〔金山口〕鍛冶の神の力を借りた呪詛。物が盗まれた場合、鍛冶屋に頼んでハンカを打たせる(ハンカは金床のことだが、ハンカを打つということがどうすることかは不明)と、盗った者は一時馬鹿になって盗品を返しにくるという。また、人に罵られた場合、その仕返しにハンカを打ってもらうよう頼むこともあった。鍛冶の神は金山様と称して恐れられた。
- [hana]ra:[zji ハナラージ 外にも方法があろうに。他にもあろうに【選りに選って】。「今までずっと降らずにいた雨がハナラージ運動会の日に降った」。
- [hana]ra[sja]N ハナラシャン 気がきいている。気がきいて親切だ。

ha[ni= 八二 [金]鉄。

ha[ni· 八二 ○羽。○翼。○魚のひれ。フシバニ Fu[sjibani【腰羽】は背びれ。

× 八ニク 海岸の砂地帯。金久・兼久等の字をあて、奄美・沖縄の各所にある地名。

× 八ニグチ [撥ね口]他人からクチ(呪詛)を入れられた場合、ユタを頼んでクチをはね返すための呪詛。八ニグチをすると初めクチを入れた人に祟りがくるといふ。

[ha]ni[bu 八ニブ (植)えびづる・のぶどう。タノー [ta]no[: (带状水泡)の治療には、この茎を一〇センチ程度に切り取り、一方の端に口をあてて患部にその液汁を吹き付ける。

[hano]ju[N ハノユン 適う。匹敵する。いろんな面に器用である。

[hano]ra[N ハノラン 適わない。からだか意のままにならない。「年とったせいで足がハノラなくなった」。

ha[basja]N ハバシャン 匂いがよい。香ばしい。

[haba]sji[nja ハバシニヤ (植)[香ばしい菜]くさぎ【特定の種類】。この若葉をよくもんで液汁を去り、味噌汁や雑炊に野菜代用として用いる。

[haba]cju[N ハバチュン 大食する。

× ハバチャ 大食漢。

[ha]bi[ra ハビラ 蝶。

ha[bu= ハブ 毒蛇の名。ただし永良部にはいない。永良部では×地に生えて突がった石。

○人の後頭部の突き出たところ。×三味線の海老尾をいう。

ha[busji ハブシ 蒔き餌。

ha[busjuN ハブシュン ○餌をまいて魚をおびき寄せる。○金や物で人を釣る。

[habu]ju[N ハブユン ○(帽子を)かぶる。○(水を)浴びる。○(傘を)さす。○(借金を)負う。○(罰を)受ける。

ha[bu]ra ハブラ ○子供の遊びで降参の意でいう言葉。○かくれんぼうで相手が発見できぬとき、謎々で答が出せないときなどに言う。

ha[buri]juN ハブリユン ぼんやりとかすむ。

ha[burimi: ハブリ/ミー 視力の弱い目。

× ハマウリ 浜降り。クカル(りゅうきゅうあかしょうびん)が家に入るのは不吉な前兆とされた。そのようなことがあると家を清め、灰をかまどの前に置き上部をきれいにしなす。その夕方から食物などを持って行って家族全員が浜で過ごし、翌々日帰宅する風習があった。人の厄の前兆なら灰の上に人の足跡が、家畜の厄の前兆ならその足跡があり、厄がなければ何の足跡もつかないとされた。【これは奄美大島や徳之島の習慣だと】

[hama]kazji[ra ハマカジラ (植)ぐんばいひるがお。はまひるがお。

[hama]ku[ra ハマクラ (植)ほうせんか。この花にかたばみの葉を練り合わせて爪を赤く染めて喜ぶ。

× ハマジ (植)はまぼうふう。海岸、砂地に自生する。根はてんぷらに、葉や茎は酢味噌あえにする。

× ハマジ (魚)ぶり。

[ha]ma[Ta ハマタ [釜蓋] 藪を煮る鍋にかぶせる蓋。藁や麦藁で円錐形に作る。○親の言うことを聞かぬ者はハマタをかぶせてヒヤンタグシ [hjinja]tagu[sji (火掻き棒)で叩くと蛙になるといわれる。ヲウナイ wu[nai (姉妹)の捧げ持ったハマタの下をくぐって行くと×安全な船旅ができるといわれる。

× ハマタビ (魚)えい。

ha[madu· ハマドゥ かまど。昔は×ウウーマ石といって卵形のマー石(深成岩)三つを据えるだけだった。台所をハマドゥルメ [hama]dunu[me (かまどの前)と言い、不浄を嫌うので常に清潔にしなければならぬとされた。

ha[marasja]N ハマラシャン やかましい。うるさい。

[ha]mi[:(:) ハミ 亀。×源五郎。梅雨の頃になると海亀が産卵のため浜に上ることがあった。

産卵を終えて海に帰る際、帯や禪を行手に置いてこれを越えさせ、越えたのがいけなさいと言いがかりをつけてから仰向けにひっくりがえして捕えたという。

× ハミヌ/クウ〔亀の子〕みずすまし。

× ハミヌ/チブル〔亀の頭〕極端に小さい頭。

ha[mi] ハミ 甕。酒入れ・しおから入れ・醤油入れ・漬物入れ・にんにく漬入れ・飲料水入れ・酢造り用等がある。殆ど全部を沖縄から移入した。【すべて保存用】

[ha]mi[:] ハミ 神

× ハミウルシ 神おろし。亡くなった婦人が生前に祀っていた神を他の人に譲るため、または故人の意志を遺族に伝えるためにする神事。夜、ユタを上座に家族(分家した者、他家に嫁した者も含む)一同が列座する。線香をつけ、各人それぞれみかんの枝を持つ。ユタは「ヒンデー、ワーヌワーヌ」と唱えながらみかんの枝で畳を叩き続ける。部屋には線香とみかんの木の香りがだんだん濃くなり、単調な音と動作が繰り返されていくうちに人々は恍惚状態に陥いる。そのうち列座の女性の一人がしきりにあくびをし始め、号泣したり身もたえしたりするようになる。すなわちその人に神が降りたのである。(日常の生活で眠そうにしてあくびしている人を、神が降りたといって冷やかしたりする)。その女性が故人の祭祀を継承することになる。一生の間毎月朔日にショージをするのがそれである。現在は簡略化して神月(一、五、九月)の朔日のみにする。なお、故人の意志は神がかりになったユタが告げるのが普通であるが、前述のように一座の誰かが神がかりとなって告げる場合もある。[hami]zji[ki] ハミジキ 神月。一、五、九月をいう。島内各神社の例祭もこれらの月にある。

× ハミシドゥリ 何かの前兆。もののけの作用によるからだの疲れ。

× ハミ/ダカサン 神位が高い。

ha[miburi] ハミ/ブリ 神霊の作用によるもの狂い。これを経てユタになるのでユタブリともいう。

ha[mi=] ハミ 敷居。ハミ(神)に通ずるせいか大切にされる。かつては、柱と接するところに、毎月朔日には洗米を供え酒を注ぐ風習があった。また、室内を通る敷居には障子ふすま等の建具がないのが普通である。

ha[miwa_] [u]ja[nu_] [ej]ra[:] ハミワ、ウヤヌ/チラ (諺)敷居は親の顔。踏んではいけない。

ha[micjikijuN] ハミチキユン 励む。精出す。

ha[micjikin_u.ta]raN ハミチキヌ/タラン 努力が足りない。

[hami]du[ru] ハミドゥル 雷。

[hami]duruma:[mi] ハミドゥル/マーミー (植)〔雷豆〕そらまめ。【花の時に】ハミドゥルが鳴ると実りが悪いという。砂糖煮や味噌煮にする。固くなったのを待って収穫すると保存がきく。煮て潰して餡を造ることもできる。

[hami]ju[N] ハミユン (一)〇物を頭に載せることで、島の婦人に最も多い運搬法。(二)〇(牛が角で)突く。(三)〇(妻を、夫を)もらう。

ha[miN] ハミン 嗅ぐ。

[ka]mi[N] (OK) ハミン 噛む。

バム (助) ~とも。「^ˈi[kabamu_wu[rabamu] 行かバム、居らバム君の自由だ」(行くと同居るとも君の自由だ)【cf. [haka]ba[mu] 書かなければ】

ha[ja] ハヤ・×フウヤ 柱。

[haja]sju[N] ハヤシュン 〇(一)(舟などを【車も】)走らせる。〇(二)(水や汗、よだれju[dai]等を)流す。〇(三)(茶を茶碗に)注ぐ。

× ハヤシ/グシ〔走らせ串〕茅の茎を五〇センチ程度に切ったものを投げて地面を滑らせる遊び。

[ha]ju[N] ハユン・フウユン 〇走る。〇流れる。〇国頭字では歩く、行く、去る等の意にも使う。

[ha]jo[sa]N ハヨサン かゆい。

[hajo]ga[sa ハヨガサ かいせん。

[ha]ra[(:) ハラ・フウラ 〔腹〕母系の親族。ただし現在はヒチ(父系の親族)と混同して必ずしも厳格に区別しない。

ha[ra] ハラ 径二尺余の平たく浅いざる【むしろ箕】で、水も洩らない程緻密に編んである。
○ 初その他の穀類に混ざった白穂や雑物を去る際に用いる。また、餅や菓子を作ったり、石臼やふるいをを用いる際になくてはならぬ物である。

<?>[bara]i[itu バライトウ 照明の明るいさま。戸や障子をすっかり開けたさま。

ha[ragami]_[(:)sjuN) ハラガミ 汁やおかずなしで飯だけ食うこと。

[hara]kuju[N ハラクユン 企画する。策略する。やりくり算段する。

[hara]ku[i ハラクイ 企画。策略。やりくり算段。

[hara]ku[Ti ハラクイ/ティー 画策にたけた人。

<?>[ha]ra[ge ハラゲー 馬【むしろ牛】の腹がけ。

[hara]geju[N ハラゲユン くくる。荷造りする。

[ha]ra[sa]N ハラサン からい。

[ha]ra[zji ハラジ 髪。明治の初め頃までは男女とも結髪。男はまげを頭上につくり、女は後頭部につくった。釣りに行く途中妊婦や髪を乱した女に出会うと不漁であるとされる。帆船時代には金比羅神社に難船をまぬかれた鹿児島島の船乗り達の髪がたくさん奉納されてあったという。昔、船の行手をワニ(?)がさえぎって前に進ませない。船人は命の代りとして髪を毛を切って海中に投じたが去ろうとしない。ところが、他の一人がそのようにしたところ、すぐさま去った。船は一人の故に難船し、一人の故に助かるという。

× ハラジ/イーユン 〔髪入れる〕嫁を入籍させる。離婚除籍するは「ハラジヌジュン」(髪を抜く)という、ただし廃語。

× ハラジダイ 頭を結った後にできるゆとり。これにつやがあるのをよとしてした。

× ハラジ/ニジャラシ/ヲウナグワ/キガリ,ウニアチャトウ/バクヨヌ/サチトウミュン (諺) 髪を乱した女は汚れ、漁する人と博労の先を止める。そのような場合は引き返す。

[hara]zjibucji[ki ハラジ/ブチキ 髪屑【フケ】。

[ha]ra[sju, [nama]ri[zju ハラシュ・ナマリジュー 月の七、八日および二十二、三日の干満の差の少ない潮。【干上がらず、釣りに行けない】

[ha]ra[da ハラダ 乾田【干上がった田で、良くない】。

[hara]cji'utu[zja ハラチ/ウトウジャ いとこ。

ha[ra'izji (OK) ハラ/ハジ 空意地。

× バラバラ 髪は長く乱れたさま。ぼうぼう。

[hara]macju[N ハラマチュン からまく。まきつく。

[hara]mi[N ハラミン はらむ。○みごもる。○石垣の中央部が前に突き出る(これはやがて崩れる状態である)。

[hara]mi[(:) ハラミー 魚の卵。魚の卵巣。

[hara]miwuna[gu ハラミ/ヲウナグ 妊婦。火事を見ると胎児にあざができるといわれる。

× ハラミ/ヲウナグワ, ケードーグシ/カムナ (諺) 妊婦は欠けた道具で食うな。胎児のために自尊せよ。

ha[ra]Ncja ハランチャ・フワランチャ 額。× 欲張りすると額に穴があくといわれる。【cf. [hara]N[cja は「つわり」の意】

ha[rijuN ハリユン ○枯れる。× 腫物が治る。

[ha]ro[(:), ha[te] ハル・フワル・ハテ・フワテ 畑。ハテは単に耕地をさすが、ハルには農耕の意味もある。【[ha]ro[(:)の方がより広い】

[hara]o'asjiku[i ハル/アシクイ 田畑に持っていく食事。

[ha]ro[:_%sjuN ハル/シュン 〔畑する〕農業をする。

- [harol]ja[: ハル/ヤー 農家。
- × ハレ 豚の胃や腸に付着した脂肪の壁。
- [ha]re[:(:) ハレ 借金。支払うべき当座。「あっちこっちのハレを済ませてほっとした」。
- gaN ハン・ガン こう。「それはハンして [ga]N[sji: 作る」。
- [gaN]ga[di ハンガディ こうまで。「ハンガディなとは思わなかった」。
- ×(gaN]ga[N ?) ハンガン こうこう。「ハンガンしたと今までのなりゆきを語った」。
- [ga]N[sji ハンシ こんなに。「ハンシ立派なものは見たことがない」。
- [gaN]sjiga[di ハンシガディ こんなにまで。
- [haNkata, [haNkatamuN ハンカタ・ハンカタ/ムン 短気者。
- [haN]kariju[N ハンカリユン こぼれる。
- × ハンカリ/チチュ (こぼれ月)下弦の月。
- [haN]gu (OK) ハング 物の始末・保管。(古)「格護」(所持すること。保有すること)。
- × ハンサジ ヌルの神事に列席する婦人が頭にかぶった布。ヲウナイのハンサジを持っていくと航海が安全だといわれた。
- [haNzjasji ハンザシ 大勢の客を迎えるため、縁側から庭に張り出して作る仮座敷。
- × ハンジ 馬のたてがみ。
- [ba]N[zji バンジ 真っ盛り。「今酒宴はバンジだ」。
- × ハンジタ さざえ等の蓋。
- [bazjo]ga[ni バ(ン)ジョーガニ [番匠金]。曲尺。○融通のきかない固い人。
- × バンジョーヌ/ハミ 曲尺の神。大工が夜更けて仕事先から帰るときは、曲尺を背に差す風習があった。曲尺の神の力による魔除けである。
- [baN]sji[ro[バンシロ (植)ばんじろう。果実が熟れると美味である。野性の固くておいしくない実をつけるのを×石バンシロ。
- × ハンゼーク [金細工]鍛冶屋。一般に恐れられた。鍛冶屋の子とけんかしてはいけない、鍛冶屋の跡地を屋敷にしてはいけないといわれる。
- [haN]da[ma ハンダマ (植)すいぜんじな。若芽を浸し物にする。茹でて酢味噌をかけて食べる。その他野菜として利用する。
- × ハンヂチ [針突き]入墨。昔、女子は十二、三歳から手の甲に簡単な入墨をし、十七、八歳に至るまでにそれをだんだん複雑にしていった。この入墨は針で突いてそこに金墨を焼酎でおろした液を塗った。入墨の技術のある人は、その技倆や模様の程度によって米一升から一斗までの報酬を得た。一方、させる方は懸命に痛さをこらえ、同僚が傍についていて声援を送って励ました。当時の女の子は、いつになったら自分も入墨ができるかと待ち焦がれたという。民謡に「夫欲しさも一時、妻欲しさも一時、綾入墨欲しさは命限り」というのがある。信仰的には、入墨をしないまま死んだ女は、霊となっても昇天できず、宙をさまようとされた。したがってそのような場合は、墨で簡単に入墨をかいて葬った。医療面では、入墨によって田虫やリュウマチの治療をした。入墨は明治九年に禁止されたが、その後もしばらくは続いた。
- [haNdogami ハンドガミ 大型の水甕。
- × ハンド/ゲール 大型の独楽。
- PaN[PaN パンパン かんかん。日が照りつけるさま。
- × バンボ こがねぶんぶん。六、七月頃に多く出て諸の葉を食いあらず。鶏を放してこれを拾い食いさせる。
- <m>[haNme ハンメ [飯米]食糧。

[hji'a]ga[i] ヒアガイ 冷えによる。腫物や傷の悪化。

<m>[hji:] ヒー 畳のへり。

hji[: ヒー 木。

[hji:]ni[mu_`i[cju_ma[kiwa_[]c]jura]sa]: ヒーニム/イチユ/マキワ, チュラサ (諺) [木にも絹糸を巻けば美しい] 馬子にも衣裳。

[hji:]nu[sja ヒーヌ/シャ 木の下。木陰。

[hji:]numagai[wa_[]c]ji[korajusjiga_[]c]ju:nu_ma[gaiwa_[]c]ji[koraraN ヒーヌ/マガイワ/チコラクシガ, チューヌ/マガイワ/チコララン (諺) 木の曲がったのは使えるが, 人の (性格の) 曲がったのは使いみちがない。

[hji:]numu[N ヒーヌムン [木のもの] 木の精としての妖怪。× 睡眠中にハマタ (釜蓋) ・子供・小動物の形をして現われ, それが人のからだの上に乗ったとたん, 意識はあっても身動きができなくなり, 呼吸が苦しくなる。そのことをヒーヌムンにウサクン (圧される) という。また, 人をだまして, 山中や海浜・墓地等あらゆるところを夜中引き回す場合もある【方向を見失い, 迷う】。そのことをヒーヌムンにスカクン [suka]ju[N (引っぱられる)] という。ヒーヌムンはよくあこうの木に棲むと言われる。

[hji:]bu[ra ヒーブラ 木叢。木立ち。【生い茂っているところ】

× ビー 首尾の略。結末。

× ビー/トゥクン 結末をしっかりとつける。今までしたことに対しての効果を最終的にあらしめる。

[bi: ビー 動詞についてそのことの担当者であることを表わす。「水汲みビー mi[zjikumibi:] (水汲みの係) (古) 「ベ」 (世襲的に一定の職業に従事した団体)

[hji:]ku[sji ヒークシ 火起こし。○火吹竹。○穴の小さいことから転じてけちん坊。

[hji:]kusji[nu_[]go:]kara_[]tiNto_[]mju][N ヒークシヌ/ゴーカー, ティント/ミュン (諺) [火吹竹の穴から天を見る] よしのずいから天のぞく。見聞の狭いこと。

[hji:]sa[N ヒーサン 寒い。

[hji:]sa[mi, [hji:]sa[mi]: ヒーサ/ミー [寒さ思い] 寒がり。

[hji:]ja ヒーヤ おお寒。

[hji:]zju ヒージュ [日中] 始終。常に。いつも。

× ヒースク 簡単な照明具の一種。

× ヒーチョ 肺病。

× ヒーチョ/サンネン, カク/イチネン (諺) 肺病三年, 癌一年 (しかもたぬ) 。

× ヒーヌ・グヒヌ [瓶・小瓶] 他家に酒を入れて持参する三合瓶をムチ/グヒヌ (持ち小瓶) 。

神社参りの際携える御神酒瓶をウミチ/グヒヌ (御神酒小瓶) と称した。

[hji:]nu`ju[: ヒーヌイユ (魚) ?しいら。

[bi:]bi ビービ 女陰。

× ビーピギ (植) まさき。垣根となる。

[hji:]buritacji ヒーブリタチ [毛群立] ○寒さや○恐さのため身の毛がよだつこと。

× ヒーフワ 強飯および粉の原料を蒸すのに用いる蒸器。小麦わらを円筒型に編んで底に小穴を設ける。八升炊きと称する大鍋にすえて用いる。上にハマタをかぶせる。

[hji:]jacjuN ヒーヤチュン 皮膚がひりひりする。

[hji:]jakasjuN ヒーヤカシュン ひりひりさせる。ひどいめにあわせる。

× ヒウチガニ 火打ち金。方五センチ, 厚さ三センチ程度の鋼鉄で, これと火打ち石を打ち合わせる。一方フクチを竹筒に入れて用意しておき, それに点火する。また, 貧乏していることを, 「×ヒウチガニを打っている」という言い方をした。

× ヒガイ かつて, 借金の利子として毎月一定の日数だけ貸手のためにした労役。

hji[kasjijama ヒカシヤマ #のような形に木を組んだもので, 上部を牛馬の背に吊し, 中部に荷を載せ, 下部は地面につけて引かせる。明治三十五年頃から始ったという。子供はこれの

小型の物を作り，上部の間に入って両手でその端を持ち，中部にざるをはめて正月用の砂などを運んだ。

hji[guru ヒグル 煤・鍋墨等。×からだに付着した汚れ【これは垢`a:]】。

hji[gurumiNzjo ヒグル/ミンジョ〔煤人形〕すすだらけのからだ。【これは言う】

× ヒゲ・ヒゼ 潮が引きつつある時。この時たこがよく出る。

hji[korosja]N ヒコロシャン 大げさだ。

× ヒジ 竹ひご。

hji[zji= ヒジ ひげ。○植物の細根。気根。

hji[sji]saN (OK) ヒシサン 薄い。○まばらである。【色や味には言わない】

[hjisji]ba[ta ヒシバタ 薄っぺら。

[hjisji]bisji[tu ヒシビシトウ 薄めに。

hji[sjizju]N ヒシジュン 潰す。

[hji]zji[cji ヒジチ 【横糸の】梭。これに突かれると大きくなれない。だから子供は機を織る傍に来るものではない。もし突かれたら梭の先を噛む。

[hji]zji]mugurasju[N ヒジムグラシユン 液体もしくは液体状のものをかき回す。【風呂をかき回す】

× ヒジャ 東。

hji[zjaho(:) ヒジャホー 昔の行政区画で現知名町の東部。

[hji]zje(:) ヒジャイ 左。左利き。

[hji]zje]'ucjo[sji ヒジャイ/ウチョシ 着物の左前。死人の着方であるとして忌まれる。

× ヒジャイ/ダイ まげを左の方に倒した髪のかき方。

× ヒジャイ/チナ〔左縄〕葬式用の縄となる。

[hji]zja[ma ヒジャマ 火災の精。鶏に似ていて赤いほおかむりをし，空の甕や桶・かご等に宿るものとされた。したがって，台所や軒下などにそのようなものを置いたり吊して置くことは忌まれた。うつむけるか水や物を入れておけばよい。ヒジャマは海でショージ(水浴で身を清める)をしてから飛んでくるものとされた。子供が火遊びすると，ヒジャマにとりつかれるぞとっておどす。赤ちゃけた髪を×ヒジャマ/ハラジ(ヒジャマ髪)という。

[hji]zja]rami[: ヒジャラ・ミーヒジャラ やぶにらみ。

[hji]zju]ru[san]N ヒジュールサン 冷たい。

[hji]zju[:-%'juN ヒジユイ，イユン 冷えが入る。寒に入る。

[hji]zju[:-[Fa:]juN ヒジユイ，ファージュン からだが底冷えする。

[hji]zju]hji]zju[tu ヒジユヒジユトウ 冷え冷えと。冷たい加減。

[hji]zju[rja]: ヒジュールヤ おお冷たい。

? ヒジュール〔冷たい物〕残飯。貧乏者。【人は[hji]zju]ruja[:】

[hji]zju]ru'a[sji ヒジュール/アシ 冷や汗。

× ヒジュール/バイ 冷えきったさま。

[hji]zju]rumizji[:(ヒジュール/ミジ 冷や水。

[hji]zju]rume[::(OK) ヒジュール/メー 冷や飯。

hji]zju]N ヒジュン かき回す。

hji]zji]ju]N (OK) ヒジュン 削減する(主として人にあげるべきものの分量の削減)

<m>hji]zju]ju]N ヒズジュン 削る。

hji]c]ji= ヒチ 肩の筋肉。(古)「けんぺき」(首から肩にかけて筋がひきつり痛むこと)。けんぺき ひき ヒチと軋じたのであろう。

hji]c]jinu-['i]zju]N ヒチヌ，イジユン〔ヒチが出る〕肩が凝る。

× ヒチ 引きたて。「叔父さんのヒチで入社できた」。

hji]c]ji ヒチ 櫃。長持ち。柩。

× ヒチヌスク/ハブユンタベ，チュー/ヲウグナ(諺)柩の中に入るまで人を軽べつするな。

hji[cejinu]ju: ヒチヌイユ (魚)すずめだい。○多量の油に入れて揚げると骨まで食える。
卵を抱いたのは特においしい。

hji[cejabujuN ヒチャブユン (大小便を不如意に)もらす。

[hjikajjuN (OK) ヒチャユン 光る。

[hjiKa]hji[Ka ヒチャヒチャ ぴかぴか。

hji[cejjuN ヒチュン 引く。曳く。抽く。挽く。弾く。○(蚊張を)吊る。

hji[cejigumike ヒチグミ/ケ 玄米をひき碎いて炊いた粥。

hji[cejizjo ヒチ/ジヨ [引き戸]母屋の西側の戸口で玄関となる。

hji[cejimi: ヒチ/ミー [引き目]横目。盗み目。

[hjikkacjimijuN ヒッカチミユン 引っ掴まえる。

× ヒッカブユン 人の言葉を根にもってすねる。

[hji[cej]raN (OK) ヒッキョラン 引き合わない。損になる。

[hji[cej]juN ヒッチチュン 引っつく。くっつく。

[hjik]ka[sji, <m>[hjik]kasjicju[:[ヒッカシ [日稼?]貧乏。貧乏者。

[hjissa ヒッサ [今朝?]先刻。とっくに。

× ヒッショ (植)ひょうたん。

× ビッタノージ (植)ひおうぎ。

× ビットウビットウ 竹その他細長いものが柔軟にしなるさま。

× ピッピギ (植)まさき。

× ヒトウ (魚)いるか。

bi[duru ビドウル ビードロ。×ガラス。○ガラス瓶のかけら。

ヒナ 他の語に冠して船を意味する語。【hji[ni]】

[hjini]u[i (OK) ヒナ/ウイ 船で行く人への饒別。

[hjini]uku[i, [hjini]izja[sji (OK) ヒナ/ウクイ・ヒナ/イジャシ 船送り。船出し。船で行く人への見送り。

× ヒナ/ウルシ 船降ろし。進水式。かつてはこの際必ず女の人を乗せるものとされた。

ユタが「十二方の神でこの舟を助けてください」と祈った。

[hjina]kubu[ri (OK) ヒナ/クブリ [船こぼれ]船の遭難。

× ヒナ/ケージ・ケージ [船楫木・楫木]造船用木材。

[hjina]ze:[ku ヒナ/ゼーク 舟大工。

[hjina]ta[bi ヒナ/タビ 船旅。藩政時代には船旅をする者は極めて少かった。特に鹿児島への旅(これを上国と称した)は、藩の慶事の際の祝儀言上のための島役人(与人・横目役等)とその下僕・医学修業のために選ばれた人等に過ぎなかった。それも島に駐在の代官に期日・同行者・所持品の一切を届けて渡航免状を得なければならなかった。船旅の一例をあげる。間切横目操坦裁は上国のため、文久三年十月二十日和泊港発。途中逆風のため琉球に漂着。翌年一月九日和泊港にまい戻る。三月六日再び船出、四月二十二日やっと鹿児島に着いた。その他中国や朝鮮に漂着した話が伝わっている。毎月十七日および盆正月の十六日は船旅に出るものではないとされる。

× ヒナト 船人。船乗り。【[hjina]nu[i という】

[hjina]ma[ki ヒナ/マキ [船負け]船酔い。

[hjina]mu[ke ヒナ/ムケ 船迎え。船で帰った人の出迎え。

× ヒナムチワ, クンチャニ/ワロラユン (諺)[舟の持ち主は乞食に笑われる]良港なく台風の多いこの島では舟に多くの経費が要り収益は少いの意。

× ヒナワタワ/ミタサティム, チューワタワ/ミタサラン (諺)[船腹は満たされても, 人の腹は満たされない]人を養っていくのは大変である。人の欲望に限りはない。

× ヒナカン/ガナシ・[macji]gana[sji (OK) マチ/ガナシ 火の神様。

× ヒナゴ 屁の詮議。「ヒナゴ, ヒナゴ, ターガヒーワ/ヒータカ, ヒーターチューワ, ミシタ

- チ、ミシケ」(ヒナゴ、ヒナゴ、誰が屁はひったか。ひった人は飯炊いて飯ケ)と唱えながら、一音毎に順次一座の者を指さし、最後のケに当たった人を当人とみなして興ずる。
- hji[ni] ヒニ 船。寝棺、× 船には女一人を乗せるものではない。どうしても乗せねばならないなら、女の着物でも一緒に乗せる。また、× 糸車やトーニ [to]:[ni] も船に乗せるものではないとされる。
- × ヒニイツソーガ/ニーモロローヨカ、チューチュイガ/クチヒラシ (諺) 舟一艘の荷をもらうより、人一人の口を減らせ。人一人の消費は大きい。
- [hjinja]go:[ra] ヒニャゴーラ 終日。
- hji[njajuN] ヒニャユン 減る。(古)「へなる」。
- × ヒニユン ひねる。
- × ヒニユイ こより。
- × ヒバ 着物の縞柄の名。
- × ビバ 小牛や山羊の首綱につける 8 の字形の木具。綱がねじれて首を締めるのを防ぐ。
- hji[bu] ヒブ 蛇。いじめると味噌がめに入るといふ。
- [hji]bu]ga[sji] ヒブガシ 蜘蛛。蜘蛛の巣。竹の先を割って のようなものを作り、三角形のところに蜘蛛の巣を巻きつけ、その粘着力を利用して蟬を捕える。× 朝蜘蛛、夕むかでは吉、その反対は凶とされる。
- × ビブギ (植)くわのはえのき。
- hji[busa]N ヒブサン 煙い。
- hji[busji] ヒブシ 煙。
- hji[busjikusasa]N ヒブシクササン 煙臭い。
- [hji]bu]sji]mi] ヒブシミ (魚)こういか。× これの墨に適当な具を入れて汁をつくり、のぼせさげの薬とする。
- hji[ma(˘)]jaN ヒマ/イヤン [暇要らぬ] 時間をとらせぬ。すぐである。「そのくらの仕事ならヒマイヤン」。一語のように用いる。
- [hji]ma]zji]c]ji] ヒマジチ 朝食と昼食の間、昼食と夕食の間にする軽い食事【おやつ】。畦布字では朝食をいう。
- hji[mado:ri] ヒマドーリ [暇倒れ] 時間を要した割には効果がないこと。
- [hji]mu]nu] ヒムヌ [干物] 正月や歳の祝などに、家族および来客にあげる祝儀用のはさみ肴で昆布やするめを小さく切ったもの。これに軽く塩を載せて渡す。客は素手で受け取り懐中して家に持ち帰る。
- [hja:] ヒャー 坂。
- [hja:]zji:] ヒャー/ジ 傾斜のある土地。
- [hja:]bate] ヒャー/パテ 傾斜のある畑。
- [hja:] ヒャー 魚の片身。
- × ヒャー・ヒャーイチュ あぜ糸。
- %hja]:] ヒャー 織機にしかけた経糸に梭を通すとき、その経糸を上下に開くのに用いる糸通し。
- %bja]:] ヒャー (植)にら。卵とじによく合う。
- × ヒャー/ガナシ 女のヌルに相当し、男で神事を司った人。
- [hja:]gi] ヒャーギ (植)いぬまき。庭木・床柱となる。
- [hja:]gi] ヒャーギ ざるの大型のもので、甘藷等を入れて頭に載せて運ぶのに用いる。
- [hja:]sa]N ヒャーサン ◦平たい。◦低い。「ヒャーサしなさい」[hja:]sa:]sji:] というと「あぐらをかいて楽にしなさい」の意。
- × ヒャー/チクリン 背の低いこと。
- × ヒャー/チンタイヌ、タカ/ヌブイ (諺)[平かたつむりの高登り] 得々としている成り上り者をいう。

- [hja:]bja:[tu ヒャービャートゥ 低いめに。
[hja:bire ヒャービレ 平べったいこと。
[hjaNcjuN ヒャンチュン 背を低くする。しゃがむ。
× ヒャーチ・モイ/ビャーチ〔開き・回り開き〕開き戸。台所の入口に用いた。
× ヒャーヌミ 南京虫。【いない】
[hja:juN ヒャーユン 雨が降らず日照りになる。
[hja:i ヒャーイ 日照り。
× ヒャーラー (植)さんごじゅ。さんごじゅの実を弾にした竹鉄砲。
[hjaku]`i[cji ヒャク/イチ〔百〕うそつき。百に一つしか本当のことはない。
<m>[hjaku_`zju:]sa[N ヒャク/ジューサン 百十三。九十七歳の歳の祝をこう称する。正名字ではカジマヤー。
× ヒャクショー/アガイヌ, タンチャマヤ (諺) 百姓あがりの短気者。成り上り者は、えてして横柄になりがち。
[hjija]zi[ru ヒャ/ジル〔冷や汁〕味噌を水で溶き、千切りにしたしその葉等を入れたもの。これを麦飯にかけて食べる。【宮崎のものとして耳にするだけ】
[hjaN]tagu[sji ヒャンタグシ〔火炊き串〕火掻き棒。これで灰をかまどの外に出しながら、燃料を補給して燃し続ける。親の言うことを聞かぬ者はハマタをかぶせてこれで叩くと蛙になるといわれる。
%hju]: ヒュー 長さの単位。ひろ。一ひろ【[Cju]hji[ru, 二ひろ Ta[hjiru]。
× ヒュー/アーヌ/カラダ, ユスニ/ムタリ (諺)〔一ひろあるからだ, 他人にもたれよ〕平常がよければ、いざというときは他人が助けてくれる。
[hju:] ヒュー 今日。
[hju:.`a[ti_`na]:[cja_`a:]mudi_`[Mu]N[na ヒュー/アティ, ナーチャ/アームディ/ムンナ (諺) 今日あって明日ありと思うな。
[hju:]wa_`[Cju:nu.%`ui, [na:]cja[wa_`du:nu.%`ui ヒューワ/チューヌウイ, ナーチャワ/ドゥーヌウイ (諺) 今日は何事, 明日は我が事。
[hju:gajuN ヒューガユン 広がる。
× ヒューガユヌ/ティニードゥ, ムヌワ/ウワーユル (諺) 広がる手にこそ, 物は載せられる。世間を広くしている人こそ, 金もうけはできる。
[hju:gijuN ヒューギユン 広げる。散らかす。
[hju:]sa[N ヒューサン 広い。
[hju:]bju:[tu ヒュービュートゥ 広々と。
[hju:]du[i[ヒュードゥイ ひよどり。
× ヒューナカ〔俵中〕かつては三斗で一俵だったので, 一斗五升をこういった。
[hju:]nu[`ju:[ヒューヌイユ (魚)しいら。沖合いで釣る。
[hju:]hju (OK) ヒューヒュー ベル。草笛。がじゅまる等, 固めの葉を丸く巻き, 穴の細い方の一端を軽く折って吹きならす。そてつの実に穴をあけて中身を取り出し, その穴に口をあてて鳴らす。【幼児語】
[hju:juN ヒューユン 拾う。
[hju:igure ヒューイ/グレ 拾い食い。摘みみ食い。
[hji]ju[N ヒユン 蹴る。
[hjiri]cjarasju[N ヒリ/チャラシュン 蹴散らす。
%hju][N ヒユン 乾く。干る。
%hju][N ヒユン (屁を)ひる。
[hjo:]sji(:) ヒョーシ 拍子。折り。「よいヒョーシに ju[kwa_`hjo:]sji[ni 雨が降った」
× ヒョード 占い。易。ただし廃語。
bi[ra ビラ・×ビル からだの弱いこと。病弱者。

- [bi]ra[sa]N ビラサン 【餅や体が】柔かい。弱い。
 bi[ratai] ビラタイ ○柔かいこと。○弱いこと。○病弱者。【[ˈumu]bi[ra] 芋ピラ = 病弱な人】
 [bira]bi[ra] ビラピラ 柔かいさま。【弱いさまも】
- bi[ri], [biri]ku[su] ビリ・ビルクス 最後尾。
 [hjiri]kusa[sa]N ヒリクササン 生臭い(主として○魚臭)。
 ヒリ 強意の接頭語。
 [hjiri]ku[su-]baba[ku[su] ヒリククス・ババクス 嫌だ。相手の依頼等に対して嫌だということの強め。
 [hjiri]nagiju[N] ヒリ/ナギユン 投げるの強め。
- hji[ru= ヒル (植)にんにく。塩漬け・黒糖漬け・醤油漬け・酢漬け・焼酎漬け等にする。
 hji[ru'agi] ヒル/アギ にんにくの葉を豚の臓物・にんじん等と共に炒めたもの。
 bi[ru] ビル 海藻みる。酢味噌あえにして食べる。
 [hjiru]ku'ju[:[ヒルク/イユ 冬の早朝、珊瑚礁の潮溜りにいた魚が、潮が引いてもそのまま残されて凍えた状態にいるもの。婦人がよくこれを獲りに行く。
 <m>[hji]ru[ku-]Fa:]ju[N] ヒルク/フウユン 寒さのためからだか凍えた状態になる。
 hji[rukumi]N ヒルクミン 手足がしびれる。
 hji[rucjo:cji]N... ヒルチョーチン/チキティ, ユミ/モロイガ (諺)(昼提灯つけて嫁貰いに)三
 国一の花嫁を探し求めること。一つ年上の妻は昼提灯つけて探しても探しきれぬほどよい
 といわれる。
- hji[runi:bicji] ヒル/ニービチ 昼結婚。?かつては結婚式 [ni:]bi[cji] は夜に行われるのが普通
 だった。昼に行われるようになったのは昭和になってからのこと。
 × ヒル/ムジ (昼麦)かつては麦搗きは暮れてからするのが普通だった。収穫が多く傭い人
 の多い人だけが昼に麦搗きをした。
- [hi]re[ta] ヒレタ 平べった。
 [hjire]ju[N] ヒレユン 平べったくなる。平べったくつぶれる。
 [hjiro]ju[N] ヒロユン ?(世間と)へり下って交わる。○(親・しゅうと・しゅうとめに)仕
 える。
- [hji]N ヒン ふん。何? 問いかえしの言葉。【誰にでも使える】
 [PiN]ku, [cji]N]ku ピンク・チンク 人・動物・物の小さいこと。
 [biN]gwa ピングワ (芽小)芽。
 [hji]N]zjiju[N] ヒンジユン 逃げる。
 [hji]N]zjicjikiju[N] (OK) ヒンジ/チキユン 逃げまくる。
 [hji]N]zjimu[N] ヒンジ/ムン (逃げ者) 悪事をなしたため人目をばかっている者。
 [hji]N]zjimo:[ru] ヒンジ/モール (逃げ回り) 逃げ隠れ。
 [hji]N]zjasju[N] ヒンジャシュン 逃がす。
- [hji]N]su] ヒンス 貧乏。
 × ヒンス/シュヌ/ナゲワ, オーツクリ (諺)(貧乏している間は粟作れ) 粟は肥料をさし
 て要せず, 日照りに強く, 貯蔵がきくから。
- [biN]da[re] ピンダレ びんだらい。【カネの】洗面器。
 ピンチャ 人の複数を表わす接尾語。「親類ピンチャ [haro]zjibiN[cja] と相談する」。
 [biN]tu[i] ピントウイ (瓶取り) ナンコの際, 審判を兼ねて負者に酒を飲ませる【接待】役
 をする者。その際のピントウイ酒は普通より薄めである。
 × ヒンニャ (植)いぬびゆ。
 [hji]N]bi] ヒンビ 日々。毎日。
 × ピンブナ (魚)ふな的一种。
 [hji]N]ma (OK) ヒンマ 昼間。
 [hji]N]manibui] ヒンマ/ニブイ (昼間眠り)【遅くまで寝ている】朝寝。昼寝。

[hjiNname:sji ヒンマ/メーシ 〔昼間朝食〕非常に遅くなってする朝食。
 [hjiN]ma[sja]N ヒンマシャン。奇篤なことだ。○気が利いて親切だ。たまにしかない珍しいこと。「あの人はヒンマシヤヌ人 [hjiN]masja[nu_%cju だ」「ヒンマシヤ [hjiN]ma[sja 来れたね、何か月ぶりかな。」

フ

[Fu]i, [Fui]nu フイ 声。

× フイシュン 〔声する〕詰問・叱責のため人を呼びつける。
 × フイー かつて、昔話はおとなによって区切り区切りをはっきりつけて語られ、聞き手の子供は区切り毎に必ず「フィー」と称えなければならなかったという。
 [buigi ブイギ 砂糖搾汁機の車軸を回転させるための横木。これを牛馬につないで回転させる。

[Fuike:sjuN フイケーション 病状が再び悪化する。

[Fu]i[san]N フイサン 大きい。

[Fu]zju[N (OK) フイジュン 漕ぐ。

× フイジョ/シュン 何回もせきたてる。

[Fuino:juN フイノーユン 病状が思いがけずよくなる。

[buihazji ブイハジ ヒラリヤのため肥大した足。

× フイファイ 人をはやしたてることば。

[FuijuN フイユン 越える。またぐ。

[FuirasjuN フイラシュン 越えさせる。運んで移す。

bu[i, [bu]i]nu × ブイン 〔無塩〕塩蔵魚に対して鮮魚をいう。ブイヌイユ（ブイの魚）とも、単にブイとも。

[Fu: フー 来い。

× フー（幼）火。

%Fu[: フー 卵や穀物の殻。卵を数える単位。

[Fu: フー 〔封〕穴をふさぐこと。「鍋のフーをさせる。」

%Fu[: フー 運。危うく難をのがれた際「フーがあった」という。「果報」の「報」の転が。

Fu: フー 他の語に冠して「大」を意味する。

[Fu:]'a[zji フー/アジ 曾祖母。

[Fu:]'i[cji フー/イチ 〔大息〕ため息。

[Fu:]'ju[: フー/イユ 大魚。×釣りに行く人にフーイユを釣ってきなさいとか、たくさん釣ってきなさいなどと言ってはいけない。

× フーガマヌ/メー, ナビグウヌ/シル 〔諺〕大釜の飯, 小鍋の汁。その方がおいしい。

[Fu:]ki[nu_]sja:ni_sji[zjagiwa_][ta]ta[N フーギヌ/シャーニ, シジャギワ/タタン 〔諺〕大木の下に小木は育たぬ。「シジャギ」は「ヒエグウ」とも。

[Fu:]zja:[zja] フー/ジャージャ 〔大祖父〕曾祖父。

[Fu:]sju フー/シュ 〔大潮〕大海の水。

× フー/スディニ/シガリ 〔諺〕〔大袖にすがれ〕寄らば大樹の陰。

[Fu:]cji[bu フー/チブ 大壺。三斗以上入る大きな味噌がめ。

[Fu:]cju フー/チュ 〔大人〕おとな。

× フーチュワ/ムーティヌ/フシャ, ワラビワ/ミチヌ/フシャ 〔諺〕おとなは考えて欲しいと思ひ、子供は見ると欲しがる。

- × フードウイ/シロヨカ, クドウイ/シリ (諺) 大取りするより, 小取りせよ。一獲千金をねらうより小利を積み。
- × フードウイ/トウバチャン [大鳥飛ばした] 突然驚くべきことにあった際にいう。
- × フードウヤ/ツクイ・ウフド/ツクイ [大殿造り] フードバヤと称する四, 五寸角の材を用いた家。台風に強いが経費が高いため富豪でも母屋だけをこれにした。
[Fu:]bagu[sa, [nibu]tugu[sa フーバ/グサ・ニプトウ/グサ (植) [大葉草・根太草] おおばこ。葉をあぶってニプトウ (根太・腫物) の上に貼ると吸出しの役をする。
- × フーバルワ, フーユタ (諺) 大野原, すなわち広い世間は, フーユタすなわちすぐれたユタのようなもので, いろいろな知恵や先見の明を授けてくれる。
[Fu:]ma[sji フー/マシ 大きな田。
[Fu]:[mi フー/ミ [大兄] 長兄。長姉はフーアヤ [Fu:]'a[ja。
[Fu]:[mi フー/ミ (魚) はたんぼ。
[Fu:]mi[zji[フー/ミジ 大水。
[Fu:]mu[zji フー/ムジ 大麦。かつては, 麦の栽培は大麦が普通だった。粟と並んで甘藷に次ぐ主要な食料であり, 味噌の原料としてもなくてはならぬものだった。しかし, 脱穀が面倒で収穫が少かった (一俵から多くて三斗) ので漸次すたれ, 裸麦を作るようになった。大麦は年が改まってから最初に収穫できる穀物なのでフーヤク (大兄) という敬称もある。大麦の豊凶はその年の作物の豊作を示すものとされた。小麦は麦藁を利用するための程度しか作らなかった。
[Fu:]jame フー/ヤメ 大病。
- %bu[: ブー 人夫。賦役。
- [Fu:]kunuje[: フークヌ/アエ [奉公の祝] 就職祝。
- [Fu:]guru[mja[フーグルミヤ 毛虫の一種。
- [Fu]:[sa]N フーサン 多い。(古) 「ふさ」(多いこと) 。
- × フーシジ かつてよく現れたという妖怪。牛の形をし, 風を巻き起こし草木をゆるがせて通るといふ。この風に当たった人は病気になるので, ならないようユタに祈?してもらった。フーシジは姿は見えないで風だけを感じさせることもある。国頭字にはフーシジがよく通る所だといふのでフーシジバテという地名があったといふ。
- × フータチ [帆立て] 糸くらげ。気胞に青紫色の紐状のものがついている。これに触れると痛痒を感じる。シノともいふ。
- × ブーチャタンメ (幼) おとなが仰向けに寝て両足に子供を乗せ, 高くあげながらいう言葉。
[Fu:]te フー/テ 風袋。外見。
[Fu:]tebukura フー/テ/ブクラ 外見は立派だが中身の乏しいもの。
- × フーナ 昔のヌルの祭場。殆ど各字毎にあった。今でも方々に地名・屋号として残っている。
- × フーフ ぶんぶん。怒るさま。
[bu]:[bu ブーブ (幼) 飲み水。
- × フーユー 不精。油断。骨惜しみ。
[Fu:]ju[N フー/ユン 借りる。
- × フカ 肺。
Fu[ka= フカ (魚) ふか。人と身の丈を競って, 自分より小さいと襲うといふ。これを防ぐためには長い赤禪をつければよいといふ。
Fu[ga] フガ 卵。
[Fuga]zjicji[mi フガ/ヂチミ 卵包み。【 藁で 】 卵を包んだもの。○ 人に持たせるお土産となった。
[Fuga]Fa:[Fa フガ/フワーフワ 味付けした野菜類の上に卵を流して蒸らしたもの。【 卵とじ]

[Fuga]ja[cji フガ/ヤチ 卵焼き。厚手のものは、白み魚や豆腐をすり込んでフガヤチ鍋

[Fuga]jacjina[bi (赤がね製で長方形)で焼く。

[Fu]ka[sa]N フカサン 深い。

Fu[ka]ji フカイ 深い所。

× フカノー 五〇ぴろ以上の深海の魚を釣る漁法。

[Fu]ka[sju]N フカシュン 自慢する。

[Fu]ka[si]ma フカシマ 自慢。

Fu[kas]jiri フカシリ すかすかになっている状態の【鬆の通った】大根。

Fu[gas]juN フガシュン。穴を開ける。○頭をけがする。

× フキ 占有標。そてつ葉・茅等を突き立てる。【占有することを [kizji]juN という】

Fu[gi] フギ 陰毛。

[Fu]ki]juN フキユン 【小鳥が】さえずる。(古)「ふける」。

[bu]gi]N[sja] フギンシャ 分限者。金持ち。

[bu]ku[:] フク 泡。あぶく。

× フグ・フグガミ [反古紙]習字用紙。

Fu[gui] フグイ 鞞丸。(古)「ふぐり」。

Fu[kugi] フクギ (植)福木。○防風・防火のため屋敷の周囲に植えられる。○葉は堅いので茶請けとしての漬物等を載せる小皿代用になる。

[Fu]ku]c]i[:] フクチ がじゅまる等の朽ちてぼろぼろになったもの。【戦後、マッチのないときに】竹筒に入れ点火して火種とした。(古)「ほくち」(火打ち石で出した火を移し取る物)。
【桶の隙間に入れて水がもらないようにもした。】

Fu[ku]_[he:]juN フク/ヘーユン 暑気のため牛馬が卒倒する【動物の日射病】。

ブクラ 名詞についてそれが豊かであることを示す。葉ブクラ [Fa:bukura は×葉が生い茂っていること【葉ばかりで実がない、悪い意】、意地ブクラ 'i[zjibukura は意地っぱり。

[Fuku]ra[sja] フクラシャ 沖永良部で最も多く踊られる琉球舞踊。敬老会・歳の祝・三十三年忌等のだしものの最初はこれである。「チューヌフクラシャヤ……」[Cju:]nu_[Fuku]rasja[ja (今日の喜びは……)と歌い出すところからフクラシャという。

Fu[kuriju]N フクリユン ふくれる。○鶏が卵を抱く時期になる。

Fu[kurigwa:]sji フクリ/グワースィ [ふくれ菓子]小麦粉と砂糖にソーダを混ぜて水で練り、これを蒸した菓子。大正の頃から作り始められ現在法事の際必ず供える。

Fu[kurizjira] フクリヂラ ふくれ面【生まれつきの顔かたちにも】。

× フクルビ (魚)かわはぎ。

× ブサンコ (植)おおはまぼう。防風・防潮に役立つ。

Fu[sji]= フシ 星。×流星を見たらつばを吐かねばならない。偉い人が死ぬと星になる、星は亡くなった人の目玉である等といわれる。民謡に「後蘭孫八は死じゃらでは思んな、天じ星なとて照らば見より」(後蘭孫八《伝説上の英傑》は死んだとは思うな、天で星となって照らすから見なさい)。

Fu[sji]= フシ [腰]腰だけでなく背中も含む。

Fu[sji]_[Ke:]juN フシ/ケーユン・×シケユン 腰かける。

× フシ/ジョ 地機を織る際、布を手前に引っ張っておくため腰に掛けるもの。

× フシ/チャ 地機を織る際、腰に当てる藁製品。

Fu[sjihazji] フシ/ハジ [腰剥ぎ]肌脱ぎ【上半身を】。

× フシ/ビヤ 背中の上。部。

Fu[sjibuni] フシ/ブニ 背骨。

[Fu]sji]maga]ja フシ/マガヤ 腰の曲った者。

[Fu]sji]ka]bu フシカブ 寒の時期に大根や人参を日干しにしたもの。甕に保管しておいて日常の副食物にする。【大根や人参よりも文字どおり蕪を】

- [busji]ka[N ブシカン (植)みかんの一種で味噌漬けにする。香気がある。沖永良部特有の漬物である。
- × フジクユン 人の悪をほじくり出す。
- [Fu]sji[çji フシチ 酒を醸造する際に用いる道具。(古)「こしき」(米などを蒸すのに使う道具。鉢や甕の形で底に湯気を通す穴がある)。
- [Fuzji]çji[:], [Fuzji]çjibjo[: フジチ・×ムレ/ピョウ [乞食・貰い病]癩病。かつて癩者が乞食をしたところからきた言葉。乞食はムヌムレという。フジチが住んでいたといわれる山が方々にあり、入ったらいけない、指さしたらいけないという。
- Fu[sja]N フシャン 欲しい。助動詞としては「ブシャン」となり願望を表わす。見ブシャン [mi:]bu[sja]N は見たいの意。
- [Fu]sju[:] フシュ (植)[こしょう]。とうがらし。○乳離れさせたいとき乳頭につける。
- Fu[sjiju]N (OK) フシュン 着せる。
- [Fu]zju[N フジュン・フィジュン 漕ぐ。○居眠りでからだをふらつかせる。
- × フジョ たばこを入れる布袋。婦人はこれを財布として使い、紐を首にかけて懐に入れた。
- Fu[su= フス ヘそ。(古)「ほそ」。
- <m>Fu[su'azji フス/アジ・クワナサシ/アジ [へそ婆・子産ませ婆]産婆。
- [Fu]zu[:] フズ 去年。(古)「こぞ」。
- × フスク (魚)にざだい。
- bu[ta]: ブタ 肥えたさま。豚はウウ ['wa:] という。
- [Fu]ta[na フタナ・×フタナヤ・×フタヌエ ウムティとトーグラをつなぐところ。かつては渡りとして地面に石を置いてあったのが、短い板の廊下となり、さらに一つの部屋となった。○女客はここからウムティへ入った。六十年現在はウムティとトーグラが一体化したため、フタナは殆どなくなりつつある。
- [Fu]ta[bi フタビ 今度。今年。(古)「こたび」(今回)。
- × フダリ もう少しで悪い結果になるはずなのにならなくて済んだときに使う。「フダリ,車にはねられるところだった」。
- Fu[çji]= フチ 地下への深い穴。
- × フチ 扶持。明治の頃は月給のことをこう言った。
- [Fu]çji[-, [Fuçji]nuha[zji フチ・フチヌ/ハジ 東風。(古)「こち」。
- Fu[çjika'acjine: フチカ/アチネー 二日商い。正月二日の大安売り。
- [Fu]çji[nu フチヌ ふきん。
- [Fuçji]mu[çji フチムチ よもぎ餅。げっとうの葉などで包んで香りをつける。
- [Fuçji]mo:ju[N フチモーユン 煙が内にくすぶる。
- [Fuçju]kuruhaN[gi フチュクル/ハンギ [ふところかつぎ] 幼児を着物の背に入れて、直接肌に接するような背負い方。かつてはこれが普通の背負い方であった。
- Fu[çju]N フチュン 葺く。
- Fu[çjige フチゲ 葺き替え。
- [Fu]çju[N フチュン ○【風が】吹く。○(ぐちを)こぼす。
- Fu[çjo]bukuri フチョブクリ 旧二, 三月に吹く気持ち悪い東風。○その体質の人は頭に鈍痛を覚える。島の主要部である東部では白波が立って漁業ができない。【[Fuçjo]bukuriha[zji とも】
- %bu]kku[i ブックイ ずぶ濡れ。
- [bukumi]N ブックミン 物を区別せず一緒くたにする。
- × フディ 稲妻。
- Fu[diju]N フディユン 育つ。成長する。「穂出る」の転か。【cf. [Fudi]ju[N は雷が鳴る】
- Fu[diri_Fu]diri フディフディ (幼)寝ている幼児をなでながら大きく育ての意でいう語。
- Fu[dirasju]N フディラシュン 育てる。大きくする。

- [Fudi]ru[ku フディルク 腫物の跡にできる禿。
 Fu[te]: フテー 大変な。「この間はフテーめ Fu[te:]_me にあった」
 [Fute]'u[sji フテウシ 大きな牡牛。(古)「ことひうし」
 [Fute]sji[ku フテシク たくさん。
 [bute]ju[N ブテユン 肥える(家畜に用いる)。
 [bute]bute:[tu ブテブテートゥ 肥え太ったさま。
 [Fu]tu[: フトゥ〔不当〕無実なことに対するとがめ。【とんでもない】
 [Fu]tu[:_[habu]ju[N フトゥ/ハブユン不当などがめを受ける。
 × フトゥキヌ/マニワ/ディキユシガ, オイチユヌ/マニワ/ディキラン (諺)仏の真似はできるが, 金持ちの真似はできない。
 [Fudu]cji[: フドゥチ 機織り用のおさ
 [Fudu]cju[N フドゥチュン ほどく。
 [Fudu]kuriju[N フドゥクリユン ほどける。ほころびる。
 [Futu]Fu[tu フトゥフトゥ。からだかふるえるさま。胸がどきどきするさま。
 Fu[nasjuN フナシュン。田を耕して柔らかく平らにする。×人を苦しめる。(古)「こなす」(砕いて細かにする。ひどいめに合わせる)。
 [Funja]giju[N フニャギユン 棄てる。×紛失する【これは'o[sonujuN]。?ほっておく。共通語にした場合, 紛失したことを棄てたと言うのは誤り。
 [Funja]gi[sjiti (OK) フニャギ/シティ 物を大切にせず棄てるさま。
 [Funja]gimu[N フニャギ/ムン〔棄て物〕役立たず。世間から相手にされぬ者。
 [Funi]jaFara[sa]N フニ/ヤフアラサン〔骨柔らかい〕からだか弱い。
 [Fu]nu[ja フヌヤ この頃。近頃。
 [Fu]ne[da フネダ この間。
 [Fune]ju[N フネユン こらえる。がまんする。【精神的な悔しさの我慢のみ】
 [Fune]ri[jo]: フネリヨ〔こらえてね〕ごめんなさいの意で使う。
 Fu[ba= フバ(植)びろう。この葉でフバ笠 Fu[bagasa やフバ扇 Fu[ba'o:zji を, 繊維でみのやみの笠を作る。神木だとの感覚がある。
 Fu[bi= フビ 家の壁。【藁や木で作ったものも】
 bu[buNdaku ブブンダク 凧。高く上って唸るのを誇りとする。細長い草の葉で輪を作って凧糸を通し, 凧に送って楽しむ。
 [Fu]ma[sa]N フマサン つつましい。遠慮深い。
 × フマティヌ/チュクラ, アラティヌ/タクラ (諺)〔細手の一倉, 荒手の二倉〕入念にして時期を失するより, 少々荒っぽくても時期を失しない方が収穫が多い。
 [Fuma]ju[N フマユン 籠もる。家から外に出ない。
 [Fu]mi[: フミ 米。
 [Fumi]sa[sji フミサシ 米につく昆虫の一種【米虫】。
 × フミヌ/スバニワ/ウラユシガ, ウムヌ/スバニワ/ウララン (諺)米の傍には居れるが, 藪の傍には居れない。御飯を食べているのを見ては我慢できるが, 藪を食べているのを見ては自分も食べずにはおれない。藪の魅力には勝てぬ。
 [Fumi]nucjika[ra フミヌ/チカラ 米の力。御飯を食べないと底力が出せない。
 [Fumi]nuba[cji フミヌ/パチ 米を粗末にした罰。
 Fu[micjuN フミチュン 上からの照りと地面からの照り返しで非常に暑くなる。(古)「ほめく」(ほてる。熱する)。
 Fu[micji フミチ 炎天。
 [Fu]mi[ru フミル ばん(水鳥名) 苗代を荒らす。【苗を食べてしまう害鳥】
 Fu[mu= フム こも。かつて戸の代わりに吊したむしろ。
 [Fu]mu[ku フムク・×フームー 舞い上がる小さなほこり。(古)「ごもく」(ごみあくた)。

- Fu[jagajuN フヤガユン (量・人数が)増す。
 [Fuja]micjuN フヤミチュン 酒で上気する。ほろ酔いかげんになる。
 × フユ/アマダイニワ, マジムンム/タタン (諺)冬の軒端には妖怪さえも立たない(という程だからどうぞそんなに寒い所に立っていないで中へ上りなさい)。遠慮して外に立っている冬の客を中に招じ入れる場合にいう言葉。
 × フユニシヌ/クルティン, ママウヤヌ/チラ (諺)北風吹く冬の黒い空は, 継母の顔のように嫌なもの。
 × フユ/ハミドゥルワ, ナチ/ユガフ (諺)冬雷は夏の豊作の前兆。フユヒーサワ(冬の寒さは)とも。
 × フユ/ヘーモイワ, アミヌヤー (諺)冬の南風はすぐ雨になる。アミヌヤーはトゥナリユジ/シンナ(隣へも出かけるな)とも。
 bu[ra] ブラ ほら貝。
 × ブラ 泡。
 Fu[racjuN フラチュン (口や穴を)開ける【「開いている」はFu[racjuN】。
 [bu]ra[ru] ブラル 地名や方角名につけて集落を意味する。アカタジ/ブラルはアカタジという集落。【[Nja:]gubura[ru] 皆川, [Fa:]bura[ru] はずれの集落】
 Fu[ri= フリ これ。「それ」と厳密な区別はなく, ウリの方がよく用いられる。
 bu[ri] ブリ 無礼。失礼。敬語はグブリ [gu]bu[ri]。
 bu[ri= ブリ 他の語に冠して「群れ」を意味する。
 bu[rigwa: ブリ/グワー 〔群れ子〕たくさんの子供【人間の】。
 bu[ricja:to ブリ/チャート 〔群れ茶湯〕チャートは年忌。年忌を各戸別々に命日毎にするのでなく八月十四日一斉にすること。一部の集落で実施【皆川はしない】。
 bu[rinai ブリ/ナイ 〔群れなり〕たくさんの実がついていること。プリサガイ bu[risagai (群れ下り)とも。
 bu[ribusji ブリ/ブシ 群れ星。
 ブリ 動詞連用形について, そのことが十分過ぎること。そのことに夢中【また, 最中】なことを表わす。「湯は沸きブリ wa[cjiburi だ【沸騰】」「話しブリ [hana]sjibu[ri した」。
 Fu[rijuN フリユン 気が狂う。馬鹿になる。
 Fu[rimita, Fu[rimuni, Fu[rimunigutu フリ/ミタ・フリ/ムニ・フリ/ムニグトゥ 馬鹿な話。でたらめな話。
 × フリムンヌ/アトゥワ/タチュシガ, タマシシキヌ/アトゥワ/タタン (諺)愚か者の子孫は続くが, 知患者の子孫は続かない。患者は人をあざむいて自分の利を図ったりはしないが, 知患者はそのようなことをしがちであるからそのむくいで子孫が繁栄しない。
 Fu[rinibui フリ/ニブイ 〔馬鹿眠り〕熟睡。
 Fu[rimuN, Fu[rigure フリムンヌ, フリグレ (諺)馬鹿者の馬鹿食い。大食漢を冷やかしている言葉。
 × フルー 魚を突くやり(やす)の柄となる竹。
 × フルガミ 便所の神。
 Fu[rusa]N フルサン おとなしい。【cf.「古い」は[Fu]ru[sa]N】
 [Furu]ta:[ma フルターマ おとなしいさま。
 × フルバ 崖に掘られた洞穴で昔遺体をほうむった所。はふる場の意か。
 [Fu]ro[sa]N フロシャン 〇精神的にまた〇経済的に苦しい。
 フウ・フワン 動詞に冠して, ほうる・落とすの意を表わす。
 [Funa]gijuN (OK) フナギユン 棄てる。【[hana]gijuN という集落も】
 [FaN]karasjuN フンカラシュン こぼす。
 [FaN]tijuN フンティユン 落ちる。
 [FaN]tusjuN フントウシュン 落とす。紛失する。

%Fa]: フワー 表座敷。外。沖。母屋はフワー（表座敷）とウチ'u[cji・（内）の二つからなる。【合わせて [Fa:]'u[cji という】

[Fa:]gwa]: フワー/グワー 〔外子〕外妻の子。

[Fa:tu]zji(:) フワー/トゥジ 外妻【妾】。

[Fa:= フワー 葉。

× フワー/ゴーシ 〔葉更新〕葉柄を地にさしてそれから諸を繁殖させること。現在は行われない。

[Fa:da:munu フワー/ダームヌ 〔葉焚き物〕落葉・枯葉の燃料。主として松落葉やそてつ葉。

× フワーワ/ハリティム, ムトゥ/タティリ (諺) 葉は枯れても本を活かせ。

%Fa]: フワー 歯。

%Fa]:[-'o:]ra[N フワー/オーラン 〔歯が合わない〕気が合わない。「AさんとBさんは隣同士だがフワーオーらげんかばかりしている。」

[Fa:]gi[sji フワー/ギシ 歯ぎしり【寝ていて】。歯がみ。○「フワーギシしてがんばる。」

%Fa]:[-kui]kju[N フワー/クイキュン 〔歯を食い切る〕飲み物が歯にしみて非常に冷たいこと。

[Fa:]zji[sji フワー/ジシ 歯ぐき。(古)「はじし。」

× フワー/ムック 出っ歯。

[Fa:]ja[mi フワー/ヤミ 歯病み。歯痛。

フワー 伯を意味する語。

[Fa]:[cja フワーチャ 伯父。

[Fa]:[ma フワーマ 伯母。マーマ [ma]:[ma とも。

[Fa]:[ja フワーヤ 長姉。

[Fa]:[sa]N フワーサン 固い。

[Fa:]gwa:[tu フワーグフワートゥ 固く。固めに。丈夫に。

[Fa:]ju[N フワーユン ○固くなる。○仲が悪くなる。

[Fa]N]gu[ru フワングル 固いさま。「この実はフワングルになって食べられない。」

[Fa:]da[i フワーダイ ついでに。

[Fa:]tu[:(フワートゥ 鳩。【鳩に限らず,(名前を知らない)鳥全体を言う】

[Fa:]tu[nu_tu[da]N フワートゥヌ/トゥダン 〔鳩が飛んだ〕子供が転んで泣き出しそうになったとき,こう言って気をそらして泣くのを防ぐ。

[Fa]:[nu フワーヌー 〔花?〕死者のあった家に親戚から贈る朶もしくは粟や麦のこと【香典】。これを贈った家は,かつては三日祭りの頃まで死者の家で食事を共にする風習があったという。

[Fa]:[Fa フワーフワ ほやほや。ものの暖いさま。

[Fa:]ma[:(フワーマー 甘藷のはかま。燃料になる。

[Fa:]ju[N フワーユン 計る。

[holi] (OK) フワイ ○針。茅屋根を葺くとき,屋根下から屋根上に縄を通すために用いる長さ一間程の○竹。先端近くを斜めに切り縄を通す穴とする。

[Fai]sa[sji フワイサシ 〔針差し〕茅屋根を葺く際,フワイの穴に縄を通して,屋根下から屋根上の人へ縄を渡す仕事。その仕事をする人。

[Fai]numi[:_nu[cju]Ngane フワイヌ/ミー/ヌチュンガネ 〔針の目を通すように〕細かいことまで一々干渉するさま。重箱の隅をほじくるよう。

[holi] (OK) フワイ 秤。【計るは [Fa:]ju[N】

× フワイニ/ケーリワ, ソードウ/ヲウリユル (諺)〔秤にかけると棹が折れる〕どっちもどっちの喧嘩をいう。

[Fai]gi:, [c]jippai フワイギ・チッパイ 〔張木・つっぱり〕支柱。茅葺屋根は頭が重い台

風に弱い。そのため家を支える支柱は必需品として床下等に備えてあった。

[Fai]sɟitiju[N フワイシティユン 置き去りにする。

× フワイダク かつては娼婦・多情な女をこう言った。

× フワットウドー〔法度だぞ〕内緒話をした後、誰にももらしてはいけないぞの意で言った言葉。

× フワヒヤー 屋根の上部を葺くにも用いる短い茅。ニヒヤーに対する語。

[FaNta フワンタ 絶壁。はた(端)の転が。

[FaNta_tuN]zju[N フワンタ/トゥンジュン〔絶壁を飛び下りる〕。大変なことが身にふりかかる。○大変な馬鹿をみる。

[FaN]dani[je:] (OK) フワンダニエー〔播種祝〕十月の麦まきや正月の苗代へ播種した日に各家庭で行った祝い。その日の夕方、使いの者が三本の大蒜を携えて海岸に行き、浜の小石を三つ拾って大蒜と共に竹筒に納め、波の穂を三回汲んで竹管に満たす。この竹管は表座敷の縁側に特設された祭壇上に据えられる。その前には神酒とタチョシャが供えられる。この時点で遠来の神が竹筒をよりしろとして鎮座されたわけである。神饌としてのタチョシャは盆の上にヨナの木の葉を敷いてその上に盛り、すすきの箒を添えるのを慣例とした。ヨナの木の葉とすすきの箒は祭りの後は軒裏にさして、新穀祭の行われるまでは保存しなければならなかった。祭儀は祭主が神前に額づいて豊穰を祈念するだけである。よりしろに用いた大蒜と小石はかまどの三つ石の上に載せて海水を注ぎ、神酒と神饌は家族一同でいただいた。(柏常秋著「沖永良部島民俗誌」による)。

苗代に播種した晩のちょっとしたお祝。上城・田皆字等ではハジギの葉を茶碗に仕立て、すすきを箒にして食事をする。その晩は夫婦同食すると田の神が愠気するといわれた。(野間吉夫著「シマの生活誌」による)。

%Fu][N フン 来ぬ。来ない。

× ブン 高ぶりの気持ち。「金持ちだからといってブンを持ってはいけない」。

[FuNde フンデ〔放題〕わがまま。「子供にフンデさせるな」。

× ブントウ ちよっとも~ない。「ブントウおもしろくなかった」。

[buN][no:] (OK) ブンノー〔煩惱〕愛着。「あいつのやりくちを見ているとブンノー切れる」。

× フンニ〔首根?〕着物のおくみ【'u[ku]mi】。

× ブンブントウ 威厳のあるさま。

へ

be: ベ ~くらい。~頃。「一万円ベ ['icji]maN(?)eNbe」「八時ベ ha[cji]zjibe」。

be: ベー ばかり。「近頃は諸ベー食べている」 ['u]mu[:_%be:]。

%he][: へー 南。

[he:]mo[i], [he:](nu)ha[zji へー/モイ・へーヌ/ハジ 南風。

%he][: へー 酒糟。○豚の飼料となる。【人は食べない】

%be][:, [be:ruku ベー・ベールク 嫌だという気持ちを強調した言葉。「あかんベーだ」というのに近い。【大人でも対等以下に使う】

<m>[be:]ka[ri ベーカリ 我も我もと求めるさま。「大勢の人がベーカリして買った」。

ベーク 名詞・動詞について早さを競う意を表わす。「道ベーク」 mi[cjibe:ku【どっちの道・コースが早いか】「取りベーク」 [tori]be:[ku]。

× へーサー はやぶさ。

[he]:[sa]N へーサン 早い。

[he:]gurugu[ru へーグルグル 早くさっさと【せかす】。

- [he]:[sa] ヘーサ 早く。とっくに。
 [he]:[be]:[tu] ヘーベートゥ 早々と。
 [he]:[ju][N] ヘーユン 早まる。
 [he]:[sji]: ヘーシー 歌の囃。
 [he]:[sju][N] ヘーシュン ○囃す。○応援する。○けしかける【人を。犬には言わない】。
 [he]:[sji]: ヘーシー 〔返し〕台風一過の後、再び逆の方向から吹く風。(古)「かへし」
 × ヘーシ/チナノーリ (諺)〔灰で縄なえ〕無理な要求。
 [he]:[sji][ma] ヘーシマ 着物が裏返しなこと。(古)「かへし」(裏表を逆にする)。
 × ヘーノー はえなわ。
 × ヘーフチトゥ/ジナムチワ、タマルフドゥ/キタナサ (諺)灰吹きと金持ちは溜れば溜るほど汚い。
 [he]:[ju][N] ヘーユン からだを横にして休む【寝ることにあらず】。
 [he]:[ju][N] ヘーユン 替える。○お金をくずす。変える。
 × ベニバナ・コーカバナ (植)紅花。菊科の一年生草本。糞灰の澄汁で花卉を揉んで赤い汁を出す。みかんの汁をこれに加えたもので布を赤く染める。かつて娘が恋人に贈ったという花染手拭はこれで染めた。現在は栽培していない。
 [heN][nja](:) ヘンニャー 二の腕。(古)「かひな」。

ホ

- [ho][i][ho][i], [hai][ja] (OK) ホイ・ホイヤー 牛馬に対する合図。「ぐるっと回れ」【牛のみ。馬はいない。】
 ho[:] ホー ○皮【人参など野菜の】。○皮膚。× 甲羅。
 × ホームジャ (魚)ごまうまづら。
 [ho:], [naga][ri][go]: (OK) ホー・ナガリゴー 川。流れ川。× 泉。昭和に入っても井戸は極めて少かったのでホーは島民にとって貴重なものであり、飲料水の供給はもちろん、人・牛馬の水浴、洗濯、作物の泥落とし等に利用され、また婦人の社交場ともなった。水の神は神位が高いから泉のほとりで口論してはいけなるとされる。【流れていることが必要。流れていないと「泉」[ˈizju][mi](:)】
 [ho:] ホー 何ですか。「ヒン」の敬語。
 [ho]:[ho]: ホー 鶏を追う声。【遠くにいる場合。近くは [so]:[so]:】
 <m>[bo]: ポー・×ポーポ 〔坊〕かつて島の上流家庭の少年をさした敬称。彼らの多くは代官役所に書記として勤め、成人してからはユッチュ・ユクミ等の役職についた。比較的若い者は×ポーグワ。
 × ホーイ・ホイ ごめんよ。他家を訪れたとき、夜道で出会ったとき、相互に呼びかけることば。「オイ」より柔らかい。
 × ホーイブ おたまじゃくし。
 [ho]:[gi:] ホーギ (植)はまごう。海浜に自生する低木。蚊やりにも用いる。
 × ホー/キリユン 〔法切れる〕義理も人情もお構いなしに生きる。
 × ホークホーク 子馬を呼ぶ声。
 [ho]:[ku][su] ホークス そばかす。(古)「ほくそ」。
 [ho]:[go]:[tu] ホーゴートゥ 乾いて清潔なさま。
 [ho]:[sa][N] ホーサン 口やかましい。きびしい。
 [ho]:[zji] ホージ こうじ。かび。
 [bo]:[zu] (OK) ポージ 〔坊主〕寺がないので○神主もかく称する。

- [bo:]zjina[bi] ボージ/ナビ〔坊主鍋〕絃のない鍋。
 [bo:]zjiba[na] ボージ/バナ（植）〔坊主花〕千日紅。長持ちするので先祖棚や墓前によく供える。
 [bo:]zjiba[ja] ボージ/バヤ〔坊主柱〕床ゆかの支えをする短い柱。
 [ho:]cji ホーチ 箒。×癩病人が物乞いに来たとき、箒で追い払うと罪がないといわれた。子供は×ホーチダミ（掃く先にいてごみなどがかかる）にされると大きくなれないという。
 ×ホーチ/ススイ〔掃き拭き〕掃除。
 [ho:]cju[N] ホーチュン 掃く。
 ×ホーチャギ（植）はまびわ。
 [bo:]to:[sji] ボー/トシ 棒倒し。×砂を盛ってその上に棒を立て、数名でそれを囲んで座り、棒を倒さないように気をつけながら、自分の方にたくさん砂を取ったのを勝ちとする遊び。
 【運動会での棒倒しを言った】
 [ho:]bu[sji] ホーブシ（植）香附子。はますげ。【生え過ぎて厄介】
 ×ホーミ（魚）いそあわもち。【[ho:]mi という貝があるという。】
 ×ホーミヌ/クレサガイ（諺）〔ホーミの位下がり〕ホーミという魚は色彩は派手だが、臭いため値打ちが下がる。見かけだおしなことをいう。
 [ho:]juN ホーユン（水や砂などを）振りまく。
 [ho:]juN ホーユン 買う。
 [ho:ti_]'utu[sara[N] ホーティ/ウトウサラン〔買って落とされない〕非常に高価である。
 [ho:]ju[N] ホーユン 這う。
 [ho:]mjagaju[N] ホーミヤガユン 這い歩く。
 [ho:]jamaNge[ja] ホーヤ/マンゲヤ ごろごろ寝転んでいるさま。
 [bo:]ju[N] ボーユン 奪う。
 [ho:]jo: ホーヨー 同様。同格。「人ホーヨー [Cju:ho:jo]」は「人並み」。
 [ho:]josjuN ホーヨシュン 物の分配などの際、皆にゆきわたるようにする。
 [ho:ra(·) ホーラー〔川原〕川【のほとり】。
 ×ホーラヌ/フーヤ〔川の大姉さん〕同名の昔話に次のようなものがある。フーヤが育てた桃の木に実がなったが、登って採ることができない。ミックラウンシュというものが登って採り、実を分けあうことにしたが、フーヤのためには、下に青い物、上に熟した物を入れて渡し、自分のためにはその反対にした。この昔話にもとずいて [], 外形ばかり立派で中身の乏しいものをホーラヌフーヤという。かつては、子供達が山へ柴採りに行ってから、遊んでばかりいて、いざ帰るとき「ホーラヌフーヤしよう」と言って、青柴を中にし外側だけに枯柴をくくって持ち帰ったりしたという。
 [ho:]rasja[N] ホーラシャン 嬉しい。喜ばしい。「誇らし」の転か。
 [ho:]rasjigutu ホーラシ/グトウ 喜びごと。
 [ho:]rasja_[kaN]geju[N] ホーラシャ/カンゲユン〔嬉しいことだと考える〕嬉しいことだと受け取る。喜ぶ。
 [ho:]rasja_[sjuN] ホーラシャ/シュン〔嬉しくする〕喜ぶ。方言には「喜ぶ」にあたる一語はない。
 [ho:]rasjabanasji ホーラシャ/バナシ〔嬉し話〕悪口を言いあっているようにして、実は親密の度を加え、楽しさを増すような会話。【喜びごとを言う】
 [ho:]rja ホーリヤ あな嬉し。嬉しさのあまりに発する言葉。
 [ho:]racjuN ホーラチュン 乾く。
 [ho:]ri ホーリ ずっと。はるか。「ホーリ昔の話」。
 [ho:]N[ka] ホンカ ぶり。「知っているホンカする」'a[tjanu-[ho:]N[ka].
 ×ホンカー 桶などの水がもらないように板の合わせ目に詰め込む木の粉。
 [bo:]bo:, <m>[bo:]N[bo] ボンボン ぼうぼう 火が盛んに燃えるさま。